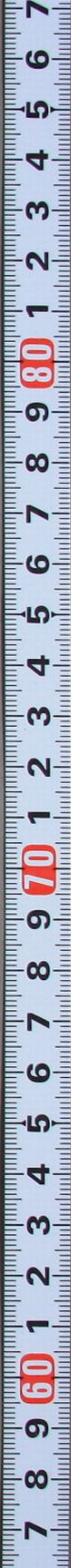




圓先大師傳

十三十四



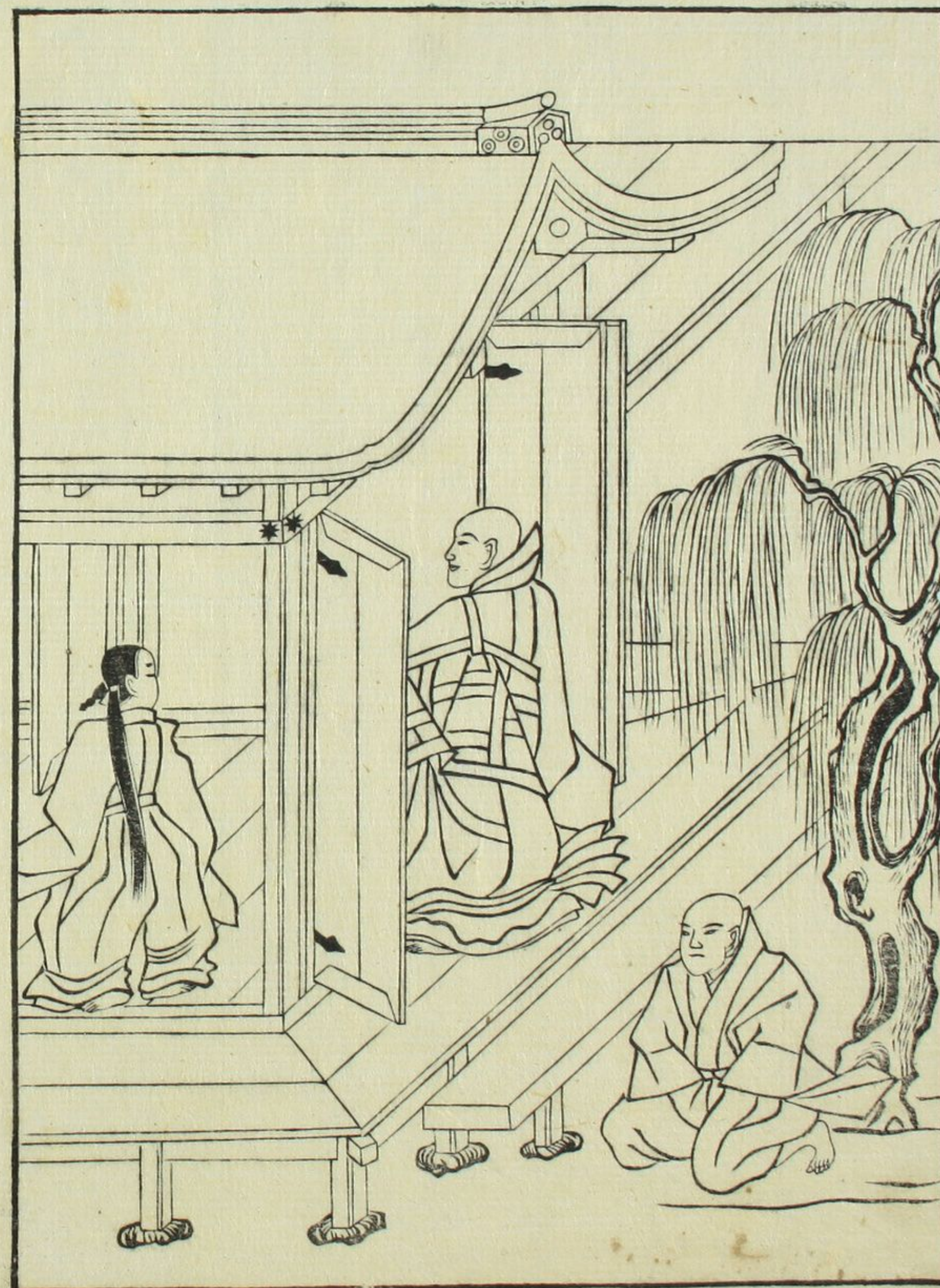
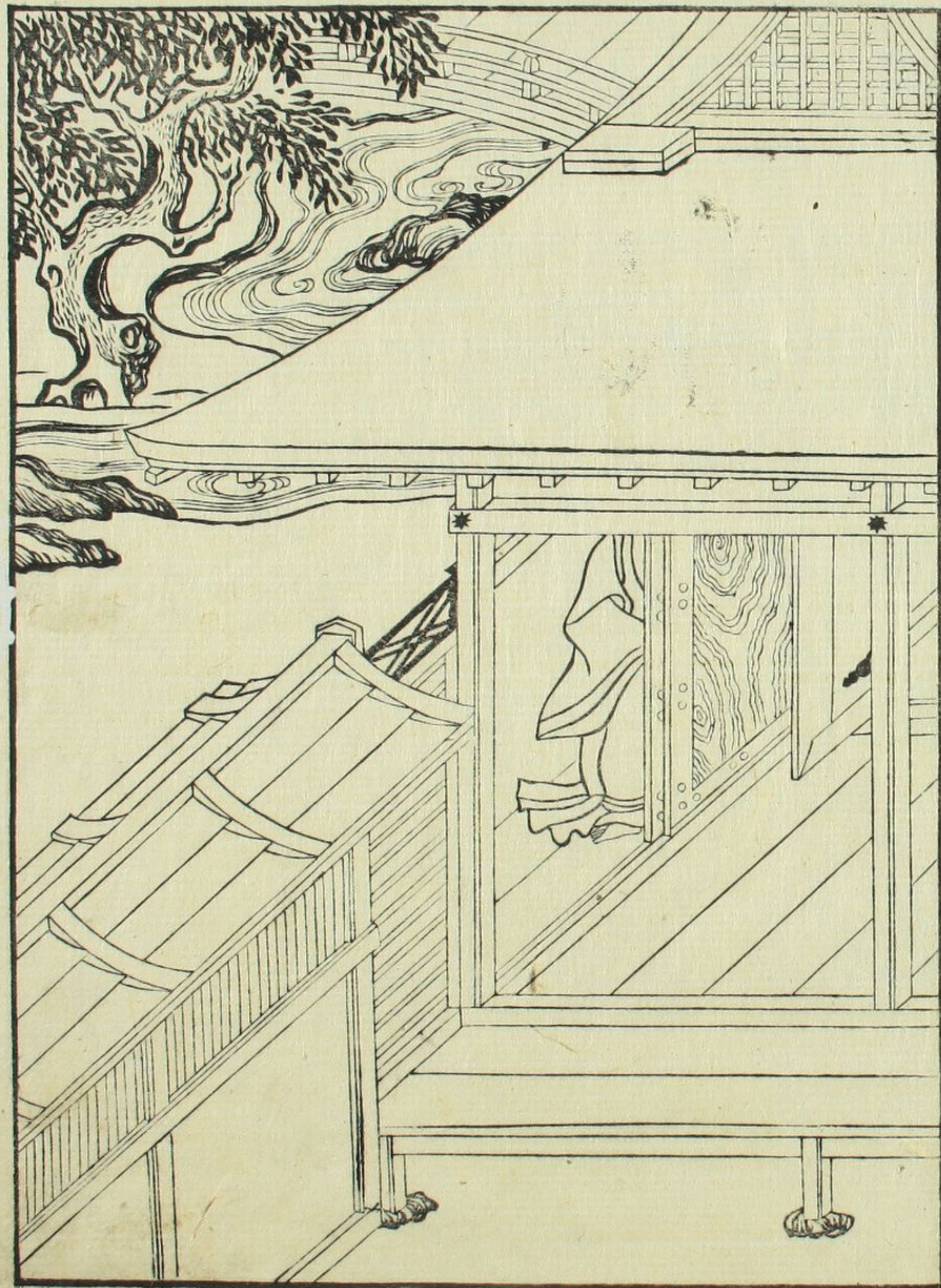
法然上人行状畫圖第十三

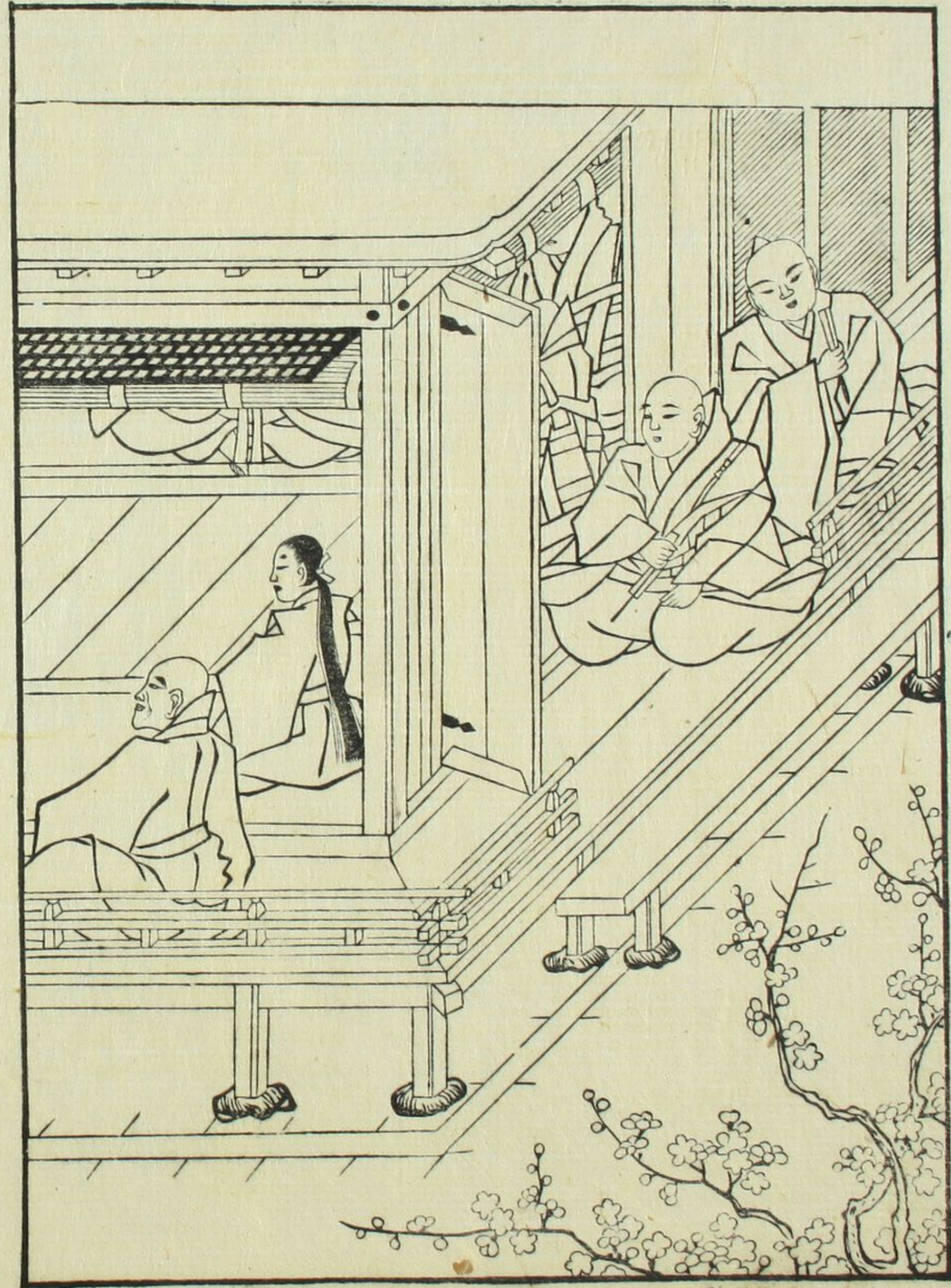
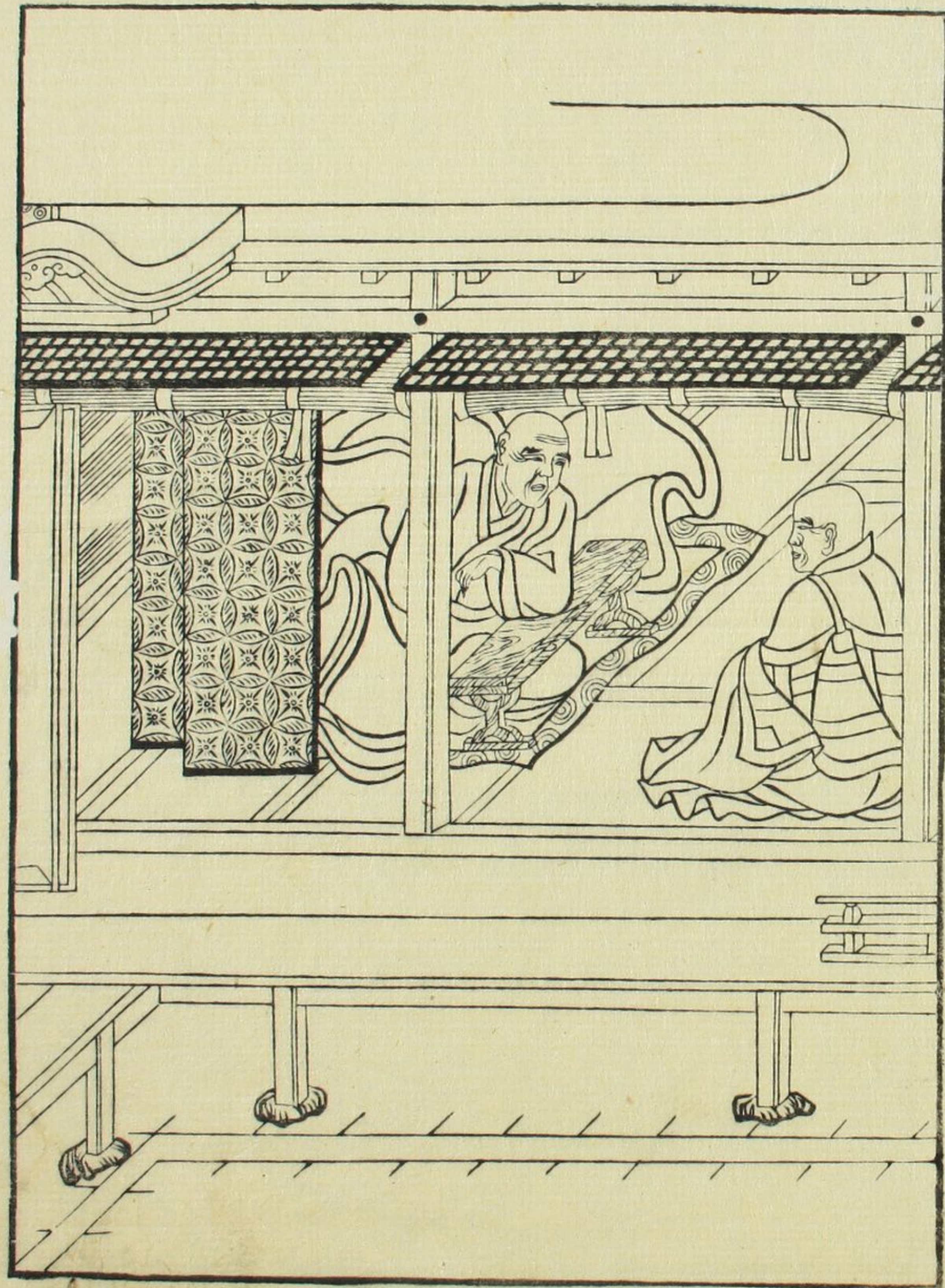
聖護院無品親王 静惠 湯邊例^{湯邊}此^{湯邊}時^{湯邊}醫^{湯邊}療^{湯邊}術^{湯邊}を^{湯邊}つ
く^{湯邊}法^{湯邊}とい^{湯邊}へ^{湯邊}も^{湯邊}志^{湯邊}す^{湯邊}一^{湯邊}た^{湯邊}り^{湯邊}事^{湯邊}れ^{湯邊}ん^{湯邊}門^{湯邊}徒^{湯邊}の上^{湯邊}総^{湯邊}宰^{湯邊}
相^{湯邊}僧^{湯邊}正^{湯邊}行^{湯邊}舜^{湯邊}大^{湯邊}貳^{湯邊}僧^{湯邊}正^{湯邊}公^{湯邊}流^{湯邊}以下^{湯邊}人^{湯邊}と^{湯邊}信^{湯邊}讀^{湯邊}ん^{湯邊}大^{湯邊}般^{湯邊}若^{湯邊}
經^{湯邊}を^{湯邊}轉^{湯邊}讀^{湯邊}し^{湯邊}て^{湯邊}祈^{湯邊}禱^{湯邊}を^{湯邊}し^{湯邊}り^{湯邊}し^{湯邊}て^{湯邊}人^{湯邊}と^{湯邊}い^{湯邊}は^{湯邊}れ^{湯邊}佛^{湯邊}
家^{湯邊}乃^{湯邊}鸞^{湯邊}鳳^{湯邊}僧^{湯邊}中^{湯邊}に^{湯邊}龍^{湯邊}象^{湯邊}が^{湯邊}り^{湯邊}ま^{湯邊}志^{湯邊}す^{湯邊}れ^{湯邊}も^{湯邊}す^{湯邊}て^{湯邊}よ
あ^{湯邊}や^{湯邊}う^{湯邊}く^{湯邊}た^{湯邊}り^{湯邊}し^{湯邊}ま^{湯邊}り^{湯邊}も^{湯邊}れ^{湯邊}ん^{湯邊}こ^{湯邊}れ^{湯邊}人^{湯邊}を^{湯邊}さ^{湯邊}し^{湯邊}て^{湯邊}れ^{湯邊}ん^{湯邊}
上^{湯邊}人^{湯邊}を^{湯邊}招^{湯邊}請^{湯邊}き^{湯邊}り^{湯邊}し^{湯邊}て^{湯邊}よ^{湯邊}御^{湯邊}使^{湯邊}二^{湯邊}度^{湯邊}ま^{湯邊}り^{湯邊}ハ^{湯邊}か^{湯邊}り^{湯邊}辭^{湯邊}

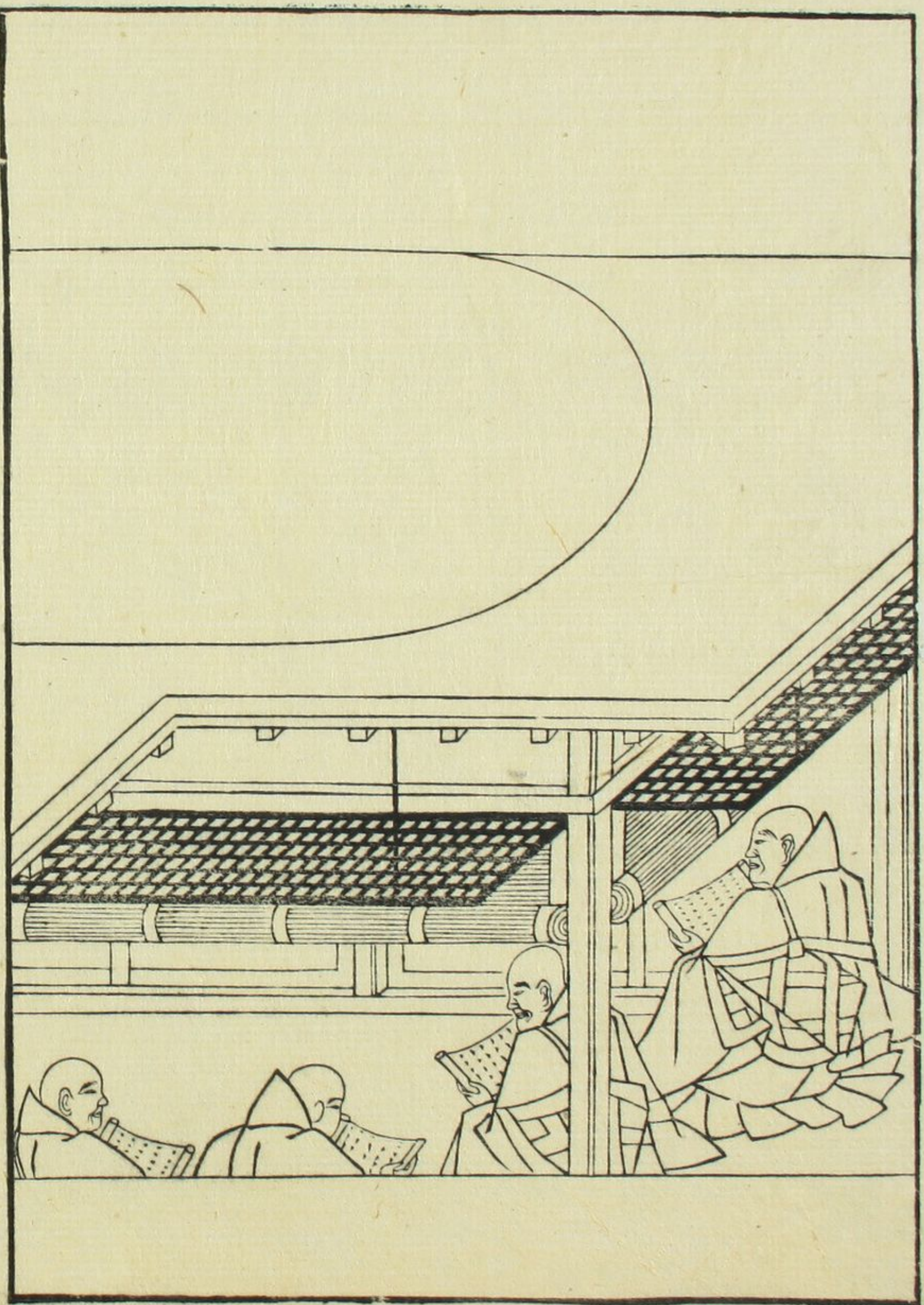


退きくまのりたまつゆ第三度代御使の宰相律
師實智しちのしちと云人來臨して。理をまげく一度より
なまひて念佛代事申さうせさ務終へて。引さる
柄よせつはまきくは往生すまはす人よて
もや法性たうさまとんそて。居く律師の車よち右具
志くまのりたまひぬ親王御對面たいめんありく。いゝて
これこゝ生死をられき侍る人き。後生たすを給へ
信しんをたまひ。上人臨終りんじゆうの行儀ぎぎを信しん申され給

隱中願代もじきをの給ゆ。親王感涙くんでい志すり
よるりたまひ。尚敬かうけい代もあこゝれをを合さう給る。
上人のやうかゆり給よ。孝親の自法往生あり
かうよ。寂後じやくごり念佛一萬五千遍申させ給て。念
佛ぶつとらまよ。息いきとほり給よ。孝り。諸人隨表ずいぎの多
ふ。法を合せ。上人の徳をを不め申さる。實智律
師後よ。法往生を。或上人よ。語申されたまひ。
上人をよるり申され給るわ

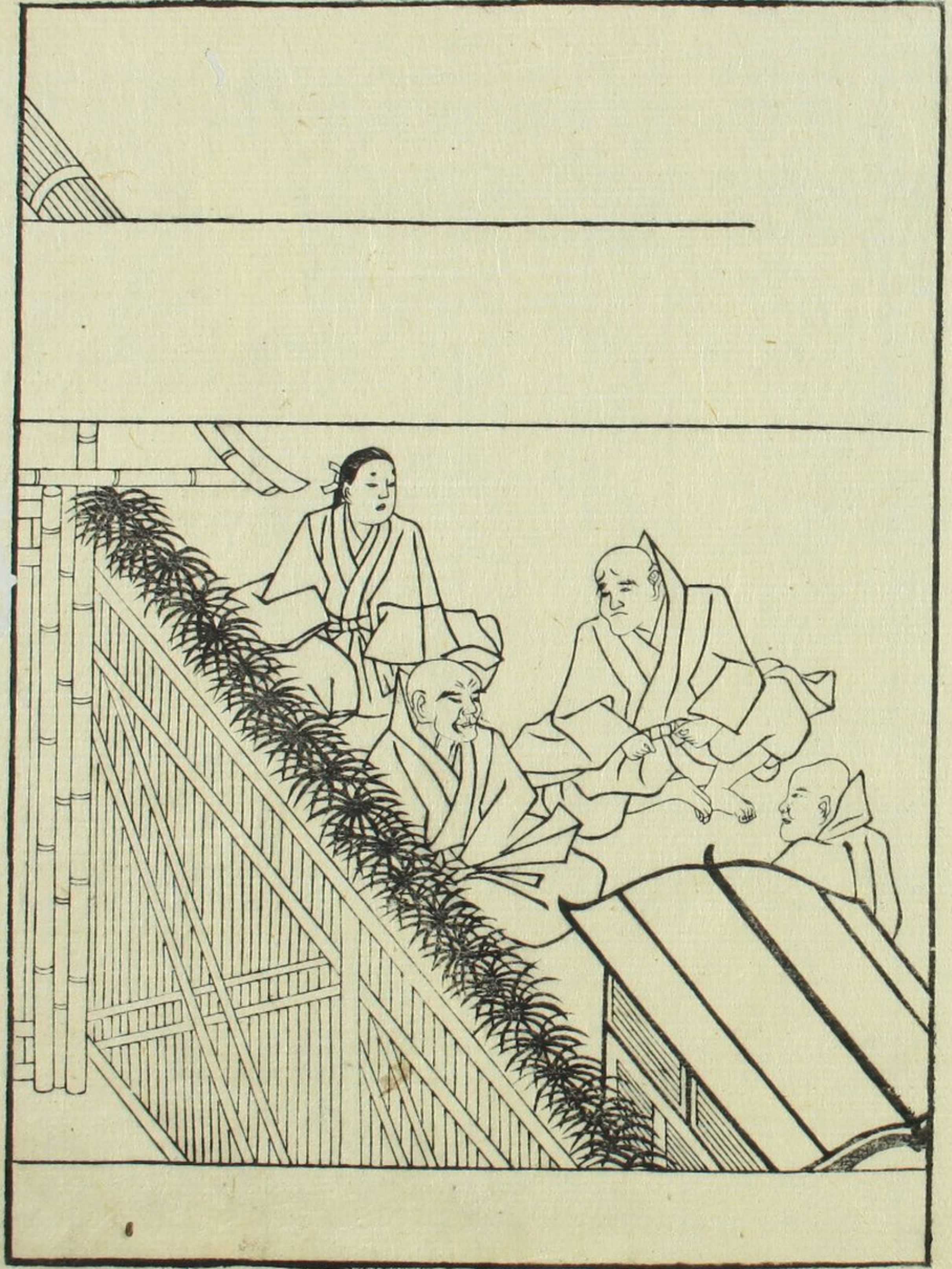


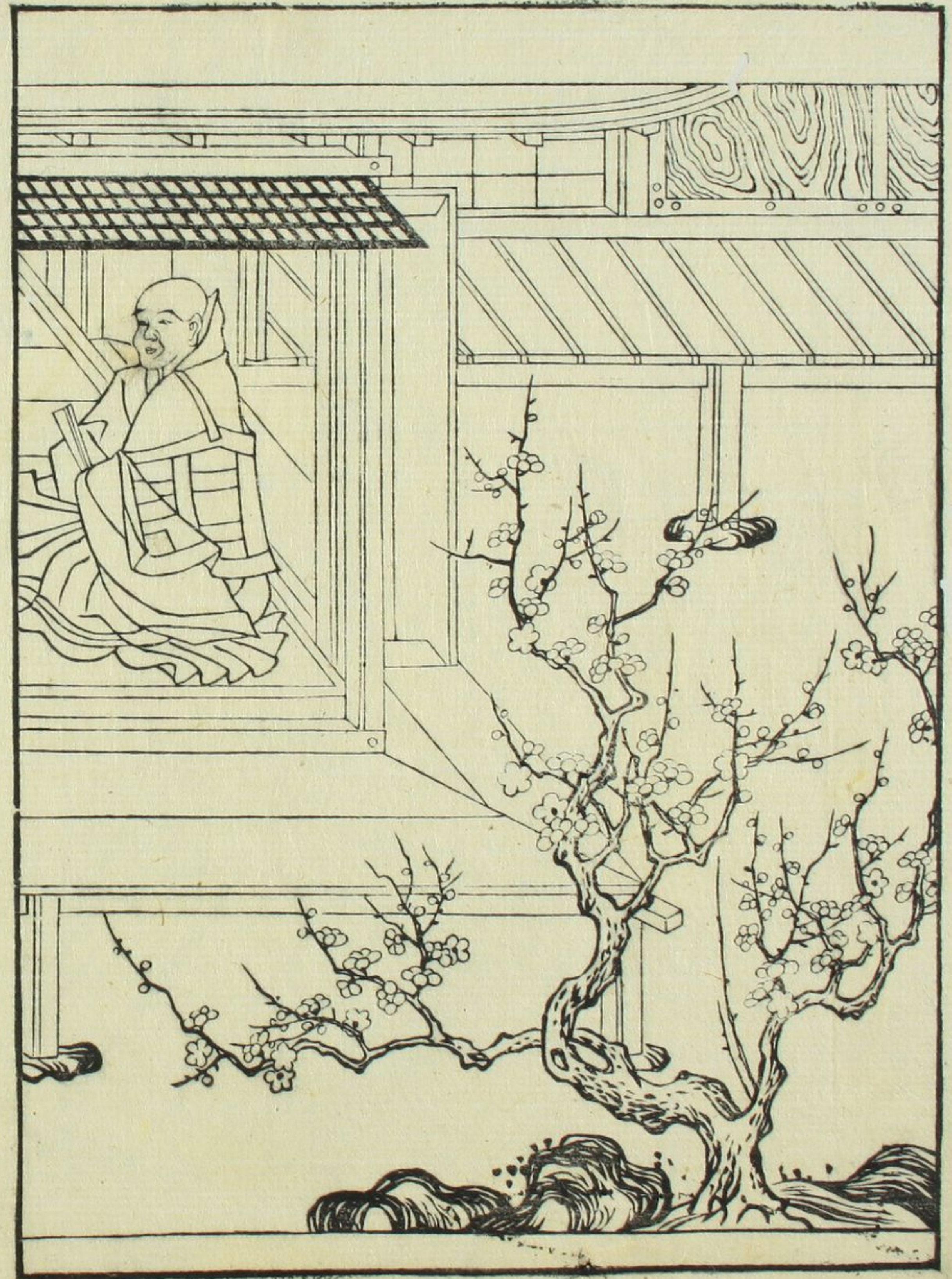
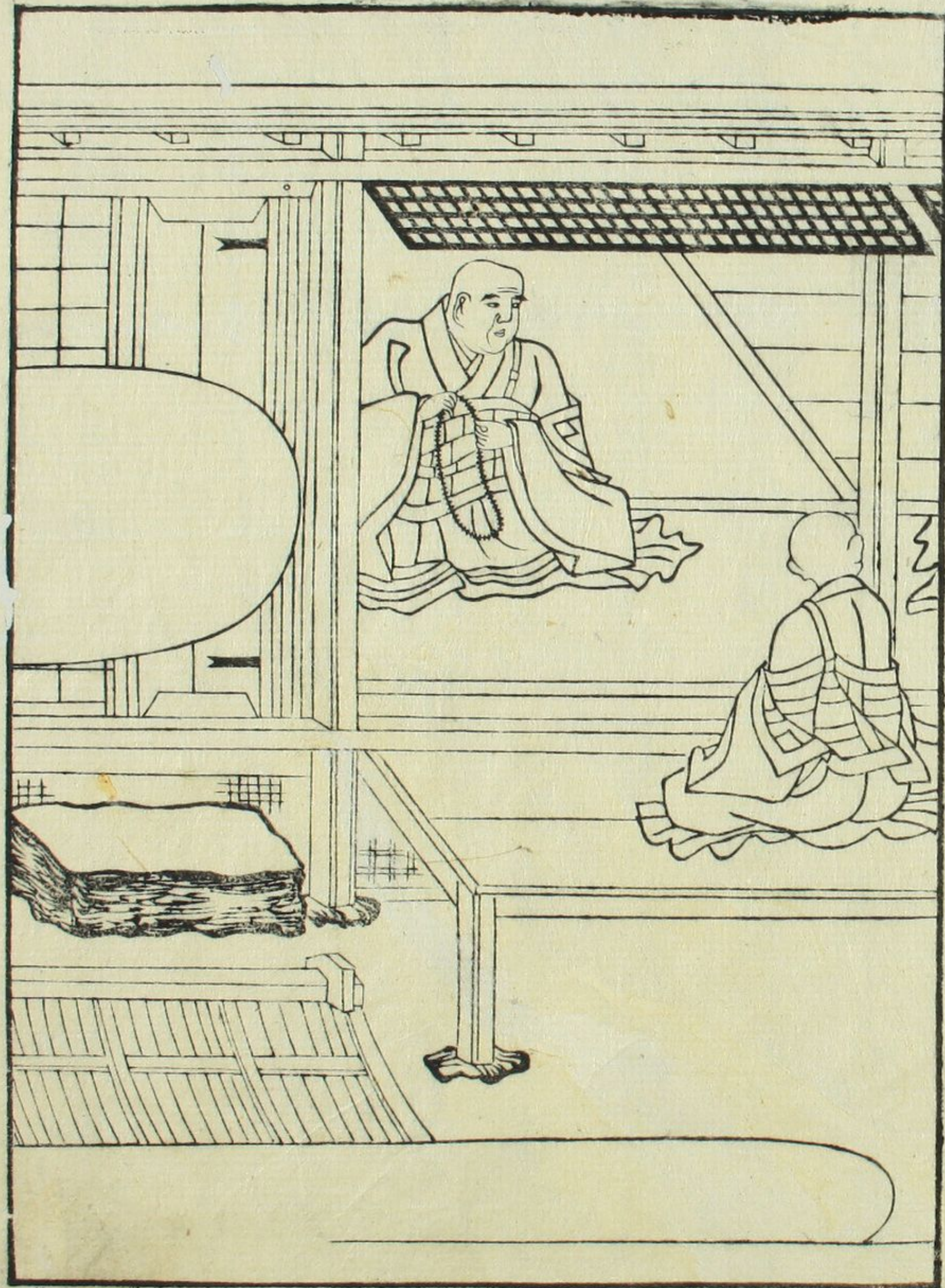




延曆寺東塔竹林房靜嚴法師吉水の禪房
 といふ。いふとて此の生死をいふは彼僧と
 の縁をいふ。源空をいふは申たくは法と云ふは彼
 の法又法又法といふは法事にてお離の道よを記
 して。智徳いふは道心といふは法せん定めて安
 立といふはいと申さるは源空ハ弥勒代本願よ
 系といふは極樂代往生候期をいふはもとく知
 と。法中申さるは法中存もかたし。法中をいふ

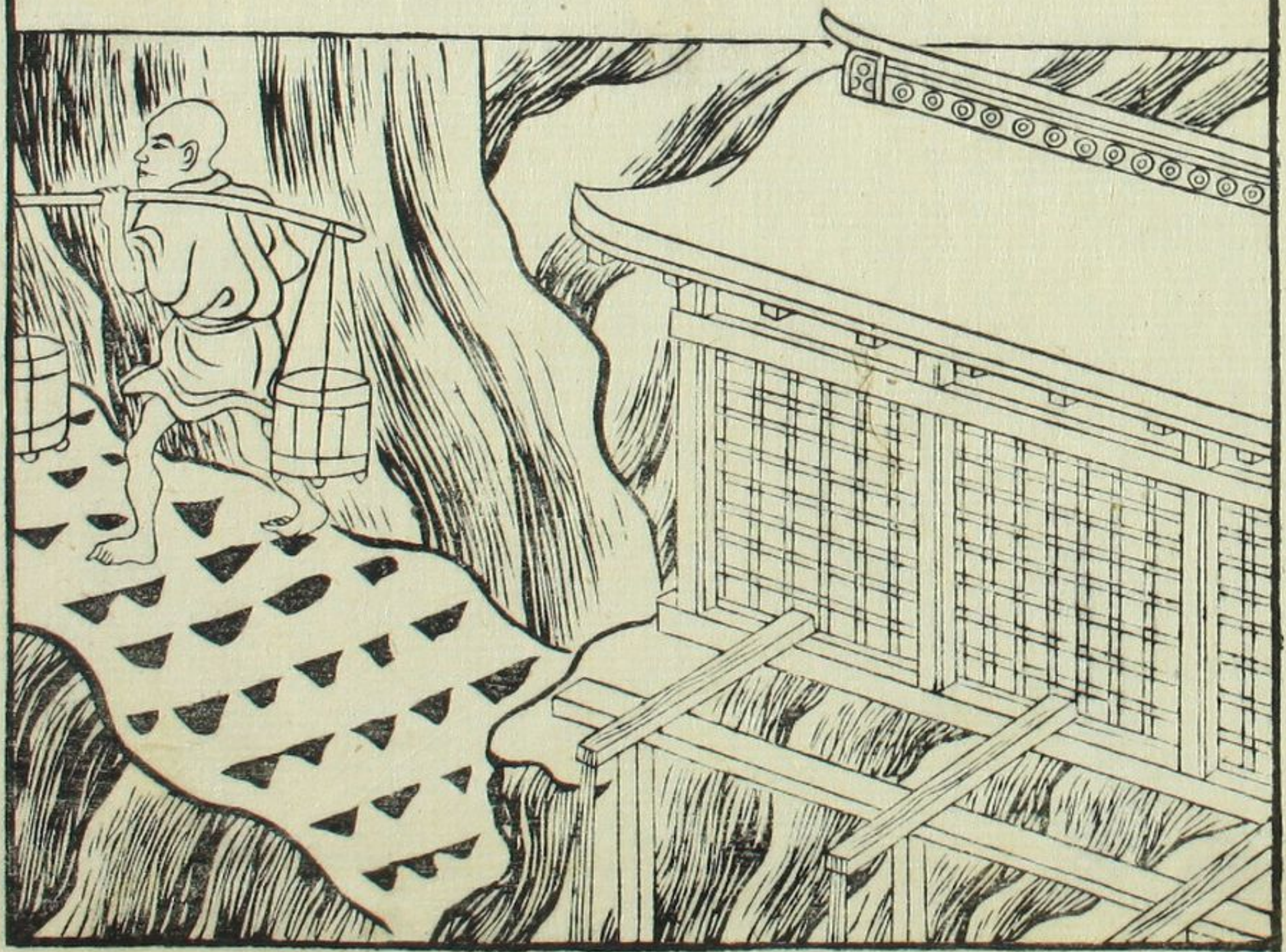
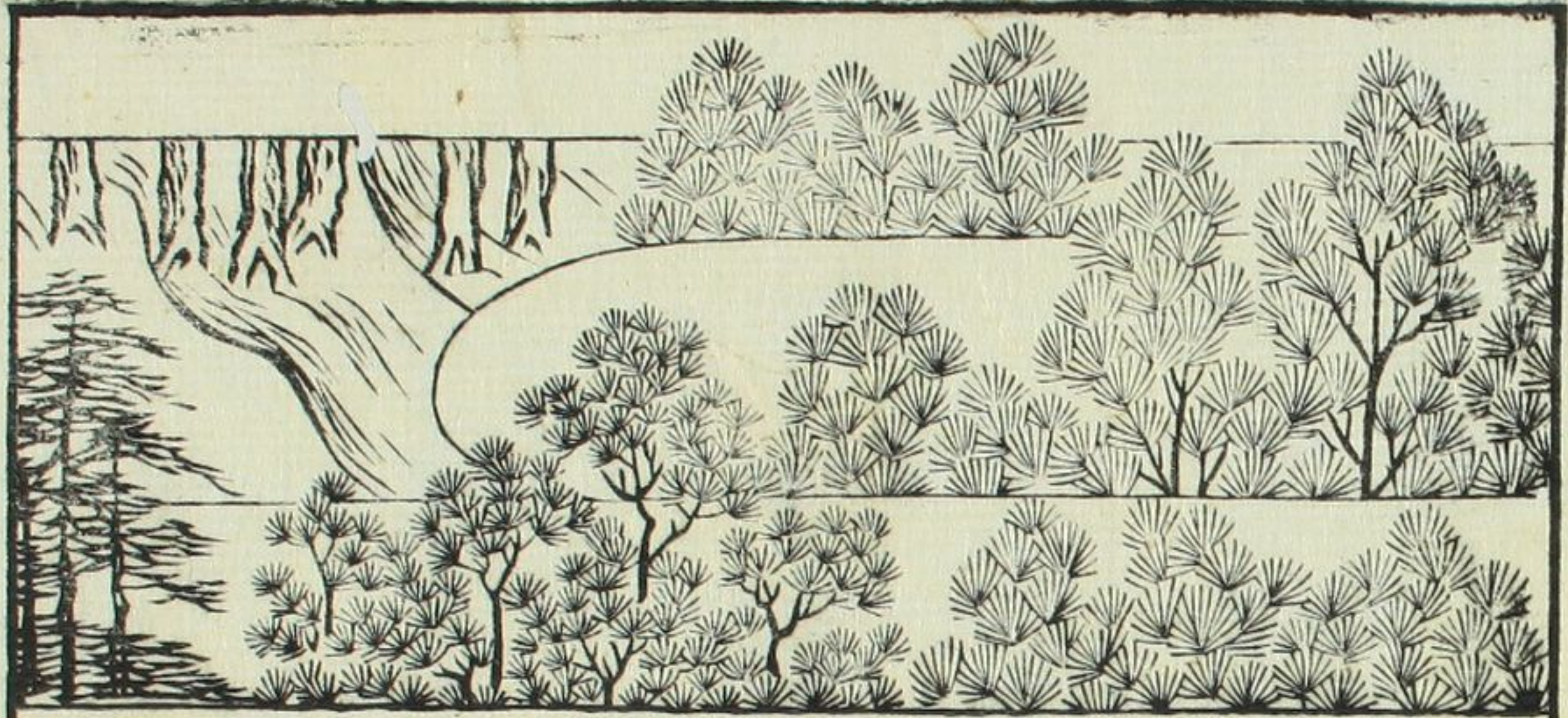
ありしはりて。思案しあんをかこむるためために尋申じんしんと
 可かなり。但たゞ妄念まうねんのまをひたらわ侍しやくををんしつ
 佛ぶつへまじり上人じやうじん乃な強かぢく。是こゝ煩惱ぼんごうの可か為なたれんらん凡ぼん夫ぶ
 此こゝ力ちから及およぶる能よく。本願ほんがんを深いひく名号なごうを唱となれ
 く。佛ぶつの願力がんりきよ業ごうを往生じやうじやう候うけおまると。法ほふ常じやう
 信心しんしん安あん定ぢやう。疑念ぎねんくちまじりよけぬ。往生じやうじやうは難がたよ
 ううくくありて。退たいおおし給たまふあり



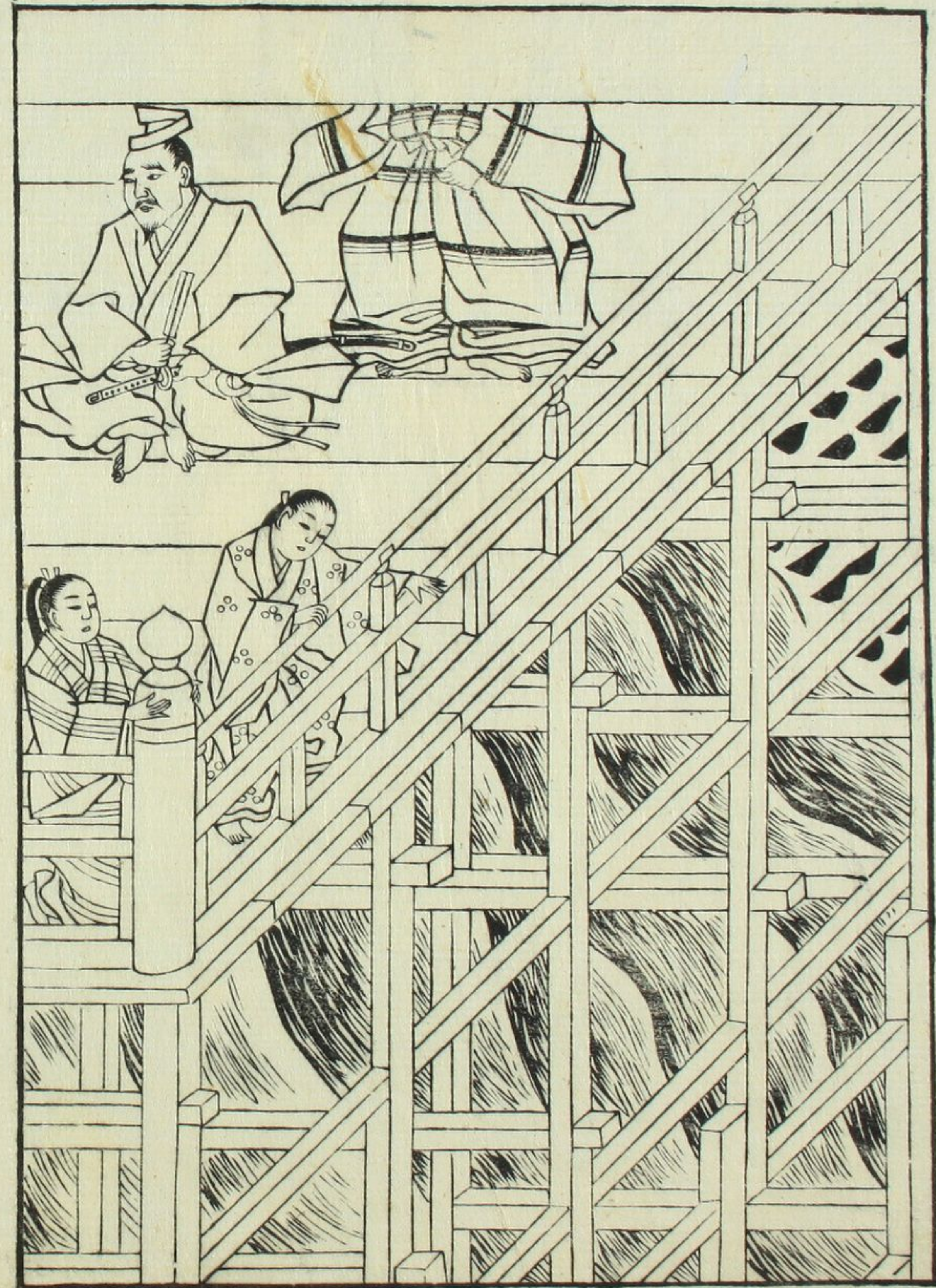
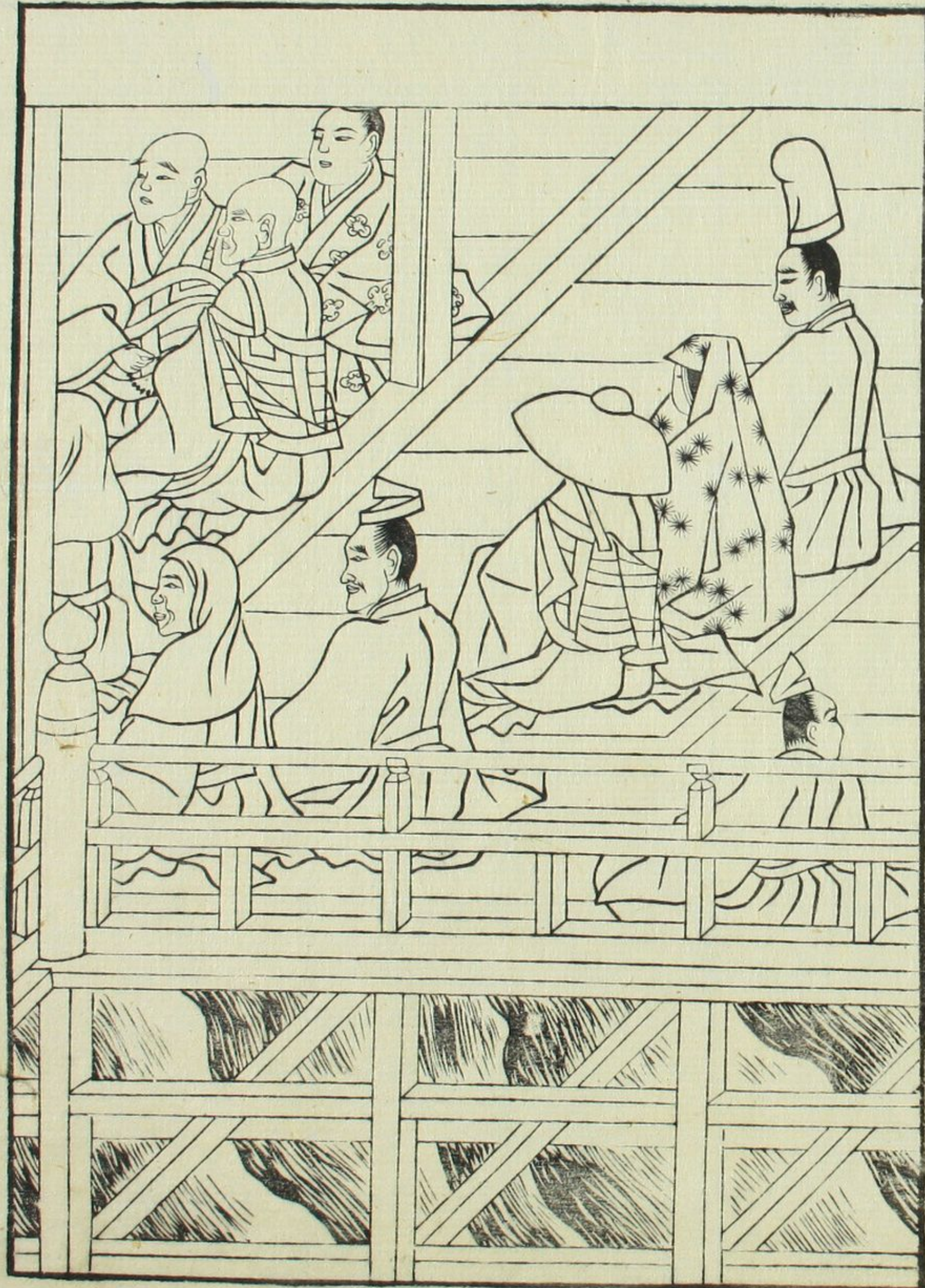


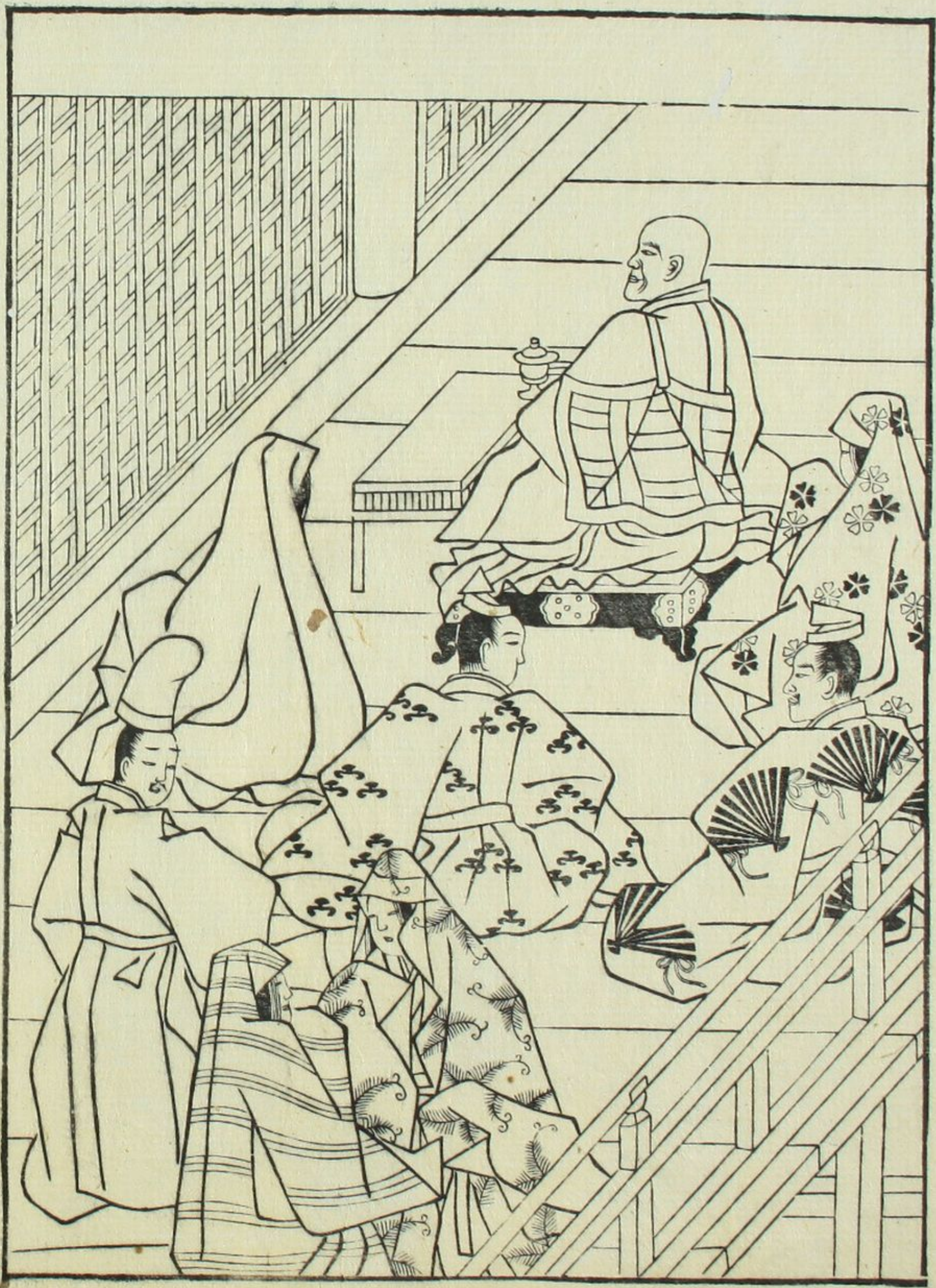
上人清水寺あり説戒ははかくに罪惡はなされ
 まらむ。中願をたのみて念佛とせ。往生うたふ
 たるにひの神んるるよす。せんまのたれ。寺家の
 大勸進沙弥中藏。うく中願。信ひくへ念佛
 よ歸と。是よよりて文治四年五月十五日。瀧山寺を
 道場うく。不断常行念佛三昧をくく。終りに
 能信といへる僧。香爐をとりて。開白發願して行
 道とるに。願主中藏寺僧等。たふといよ比丘比丘尼

それ数をとて。次結縁し。ちりて。此行いまに退轉
 たり。阿弥陀堂の常行念佛と号する。是也。作法多
 の靈像。極樂浄土よは。一生補處の隆埜。婆娑穢
 園よは。施無畏者。此大士たり。仁和寺入道親王乃
 御夢想よ。觀音とくく。のち。清りく。清水寺。此瀧
 八過去よ。此あり。此あり。現在よ。是こまあり。未來
 よ。是又。此あり。是則。大日如來の鑲字。此智
 水なり。一首。詠一たまふ



清水の遊あそびへまゝにまをのつゝま現世げんぜ安穩あんゑん後生ごせい極樂ごくらく
 と志こころ免ゆるげんご大威たいゐ儀ぎ師し後縁ごえんをま使つかひら
 て寺家てらけへた作つくらせてまたたたたてますこのたたたまま
 深ふかいい魚いたたものちりり上人じゆんじん乃な勸すす化けよよりりてこの初はつめめ
 とと不ふ断た念ねん佛ぶつををここめめるるををぶぶりりとと家け事じとと也や
 侍しやくしん





南都興福寺に古年童い上人清水寺にて説戒の時
 念佛をすゑんをばつて歸敬渴仰れあまの御そく
 發心出家して松苑寺にやうりに菴院結く念佛し
 事なるにわよ靈瑞を感し高聲念佛して往生哉
 とく能信と云僧如法經れがうぞをうへあゝ。往生人
 よ縁を結らんこめに棺のうらひの火れ役をばはらめ
 うらひ。異香衣れうへよ薰と。人々奇特れ思ひをみ
 し信心をすす者おわりの巻に



建仁二年三月十六日。上人語てのたまはく。慈眼房ハ
受戒の師範ある人。回宿して衣食の二事一向に
聖に扶持ありた。然きも法門をこしくを習た。事
いな。法門の義ハ水火れこくお遠く。つよは後
世なり。これ聖と源空とい南北は坊をあへて住
たり。ある時聖に居る坊にまへて成る。聖
えし備ひてあはし房やとよし。給へ。ありて縁
居て休と申に。大業の實智をおこして浄土に往

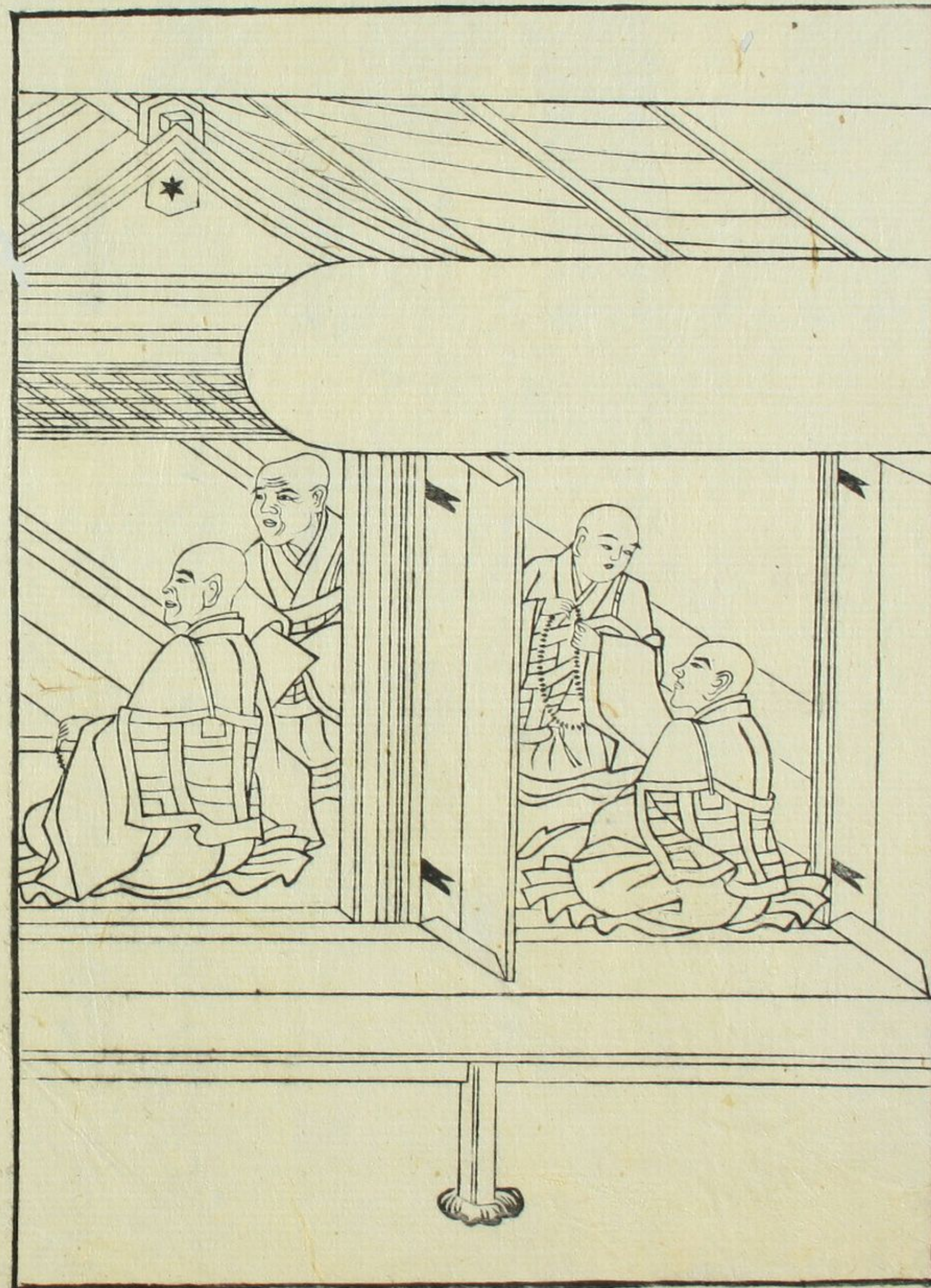
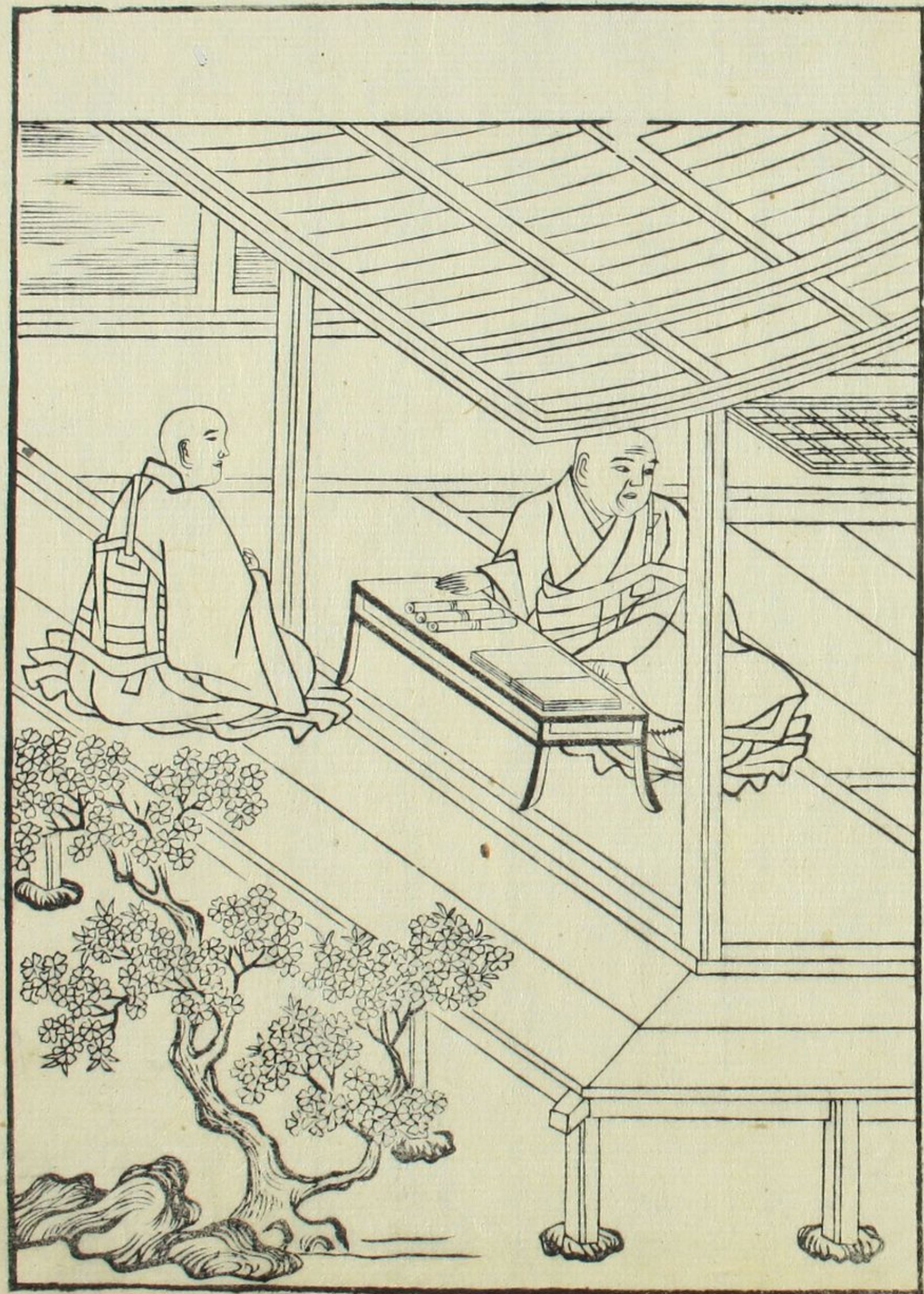
生してんやとの給よ。往生し。供ひあんと答申と。此
はまさはんえ。さるが如きのなまある。往生要集よ
見え。供と申よ。往生要集。中をえ。見え。給へ。なと
の給る。いとた。連中。成ん。さるや。らんと申た。此ハ。聖
腹立ち。枕をりこく。投ち。ようち。給へ。や。う。よ。けて
我坊の方へ。まうり。き。給へ。な。ま。あ。り。と。ま。さ。乃
柄をりこく。肩。給へ。られ。と。給へ。な。ま。あ。り。と。ま。さ。乃
も。て。あ。り。と。ま。さ。乃。の。中。あ

無益なる事をおとれどもは物申しと誓言成
ねうていさう遊んこと申されん。又服をき
らる様なる命を回宿したるが様の事をいひ合
せん料もそとあれとの様き。か様の事とては極よ
ういざうとも最後よ、覚悟房といひ、聖よ
二字成りてなり。りく弟子、成て坊舎聖教のゆ
はり文様も。さう譲渡と書れり。なをりぬ
て進上と書たなり。たびく。ま。世。またいよ

師弟となくん料よ申せとの様き。真言の師範あり
相換阿闍梨重宴之。最後よ、受戒れ弟子よ、
まて戒をうけたまひま。さう三部の灌頂をさ
けなすひ。丹後の迎接房も。りて弟子とけり
て。顯宗れ法門なり。ひ浄土の法門をい。源空よ習
はれ。往生成りけ。た。當時れ院主僧都圓長重宴
阿闍梨れ真言の弟子なり。源空よ同朋あり。ま
あ。り。圓長真言れ教相を重宴阿闍梨よ問はれ。

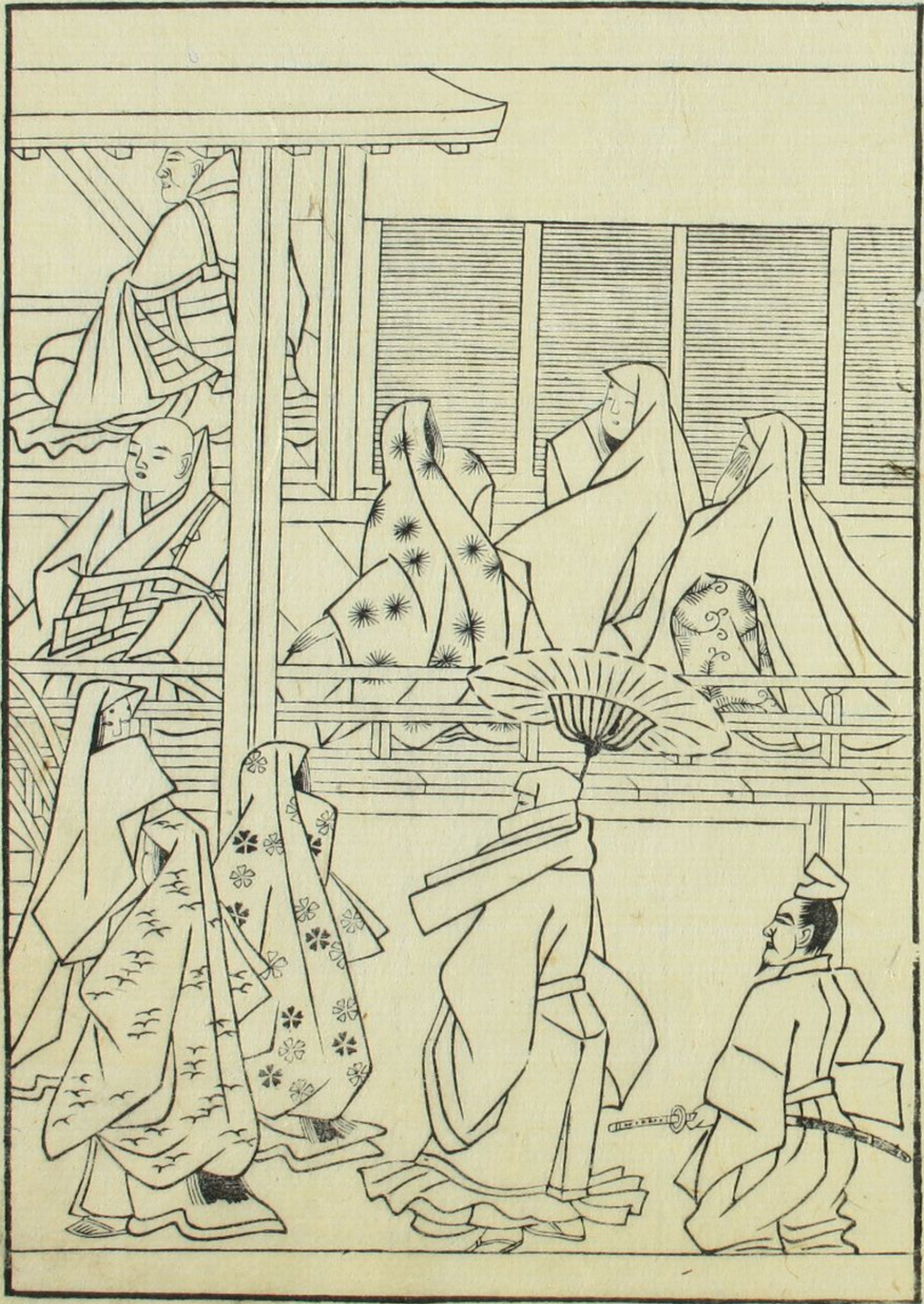
心よおほゆれもあひ非学生にてええひひぬ
そとよ。法然房より向くいとせと申さんと重要の
なほいきぬ。圓長も後より弟子より成る物なりと
云てなうて受戒して師弟たるほひよありき。
最初さいしゆの師範しはんありしまじ教まじ作さくの觀くわん覺かく得とく業ごふも弟子にあり
て源宣げんせん戒師かいしとして受戒し給た。おろし師範と
弟子と成給し中にも。當時の碩しやく学がく共どもの慈眼房じげんぼうに受
戒の弟子なりぬ。あまたにぞれ師乃慈眼房なり。へりて

弟子よ成給し事ことの不思議ふしぎは事こととておほゆきふ
と。あへくさうに給へんまじく。皆みな隨喜ずいき。不思議の
事ことなりと申あひなふ。

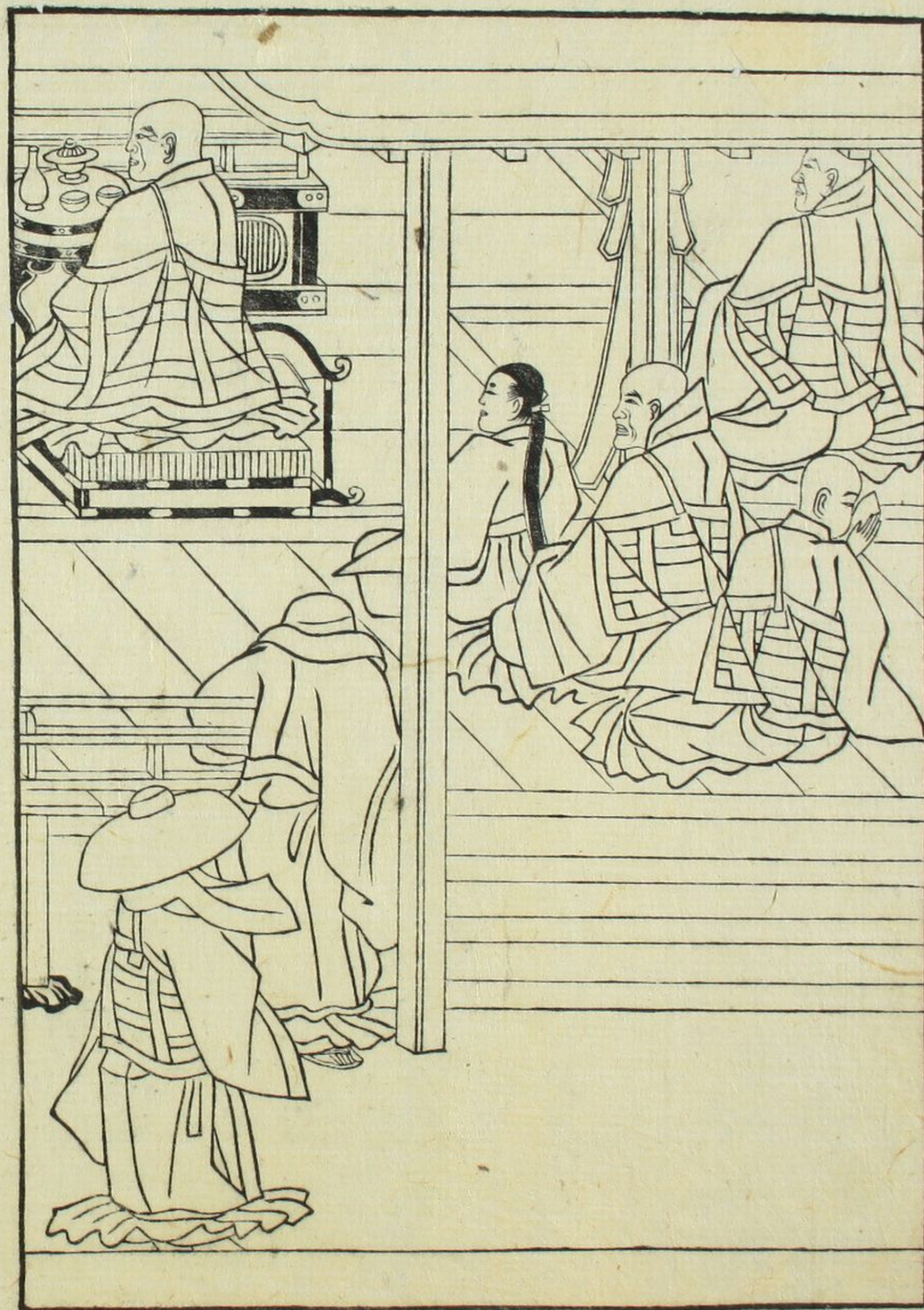
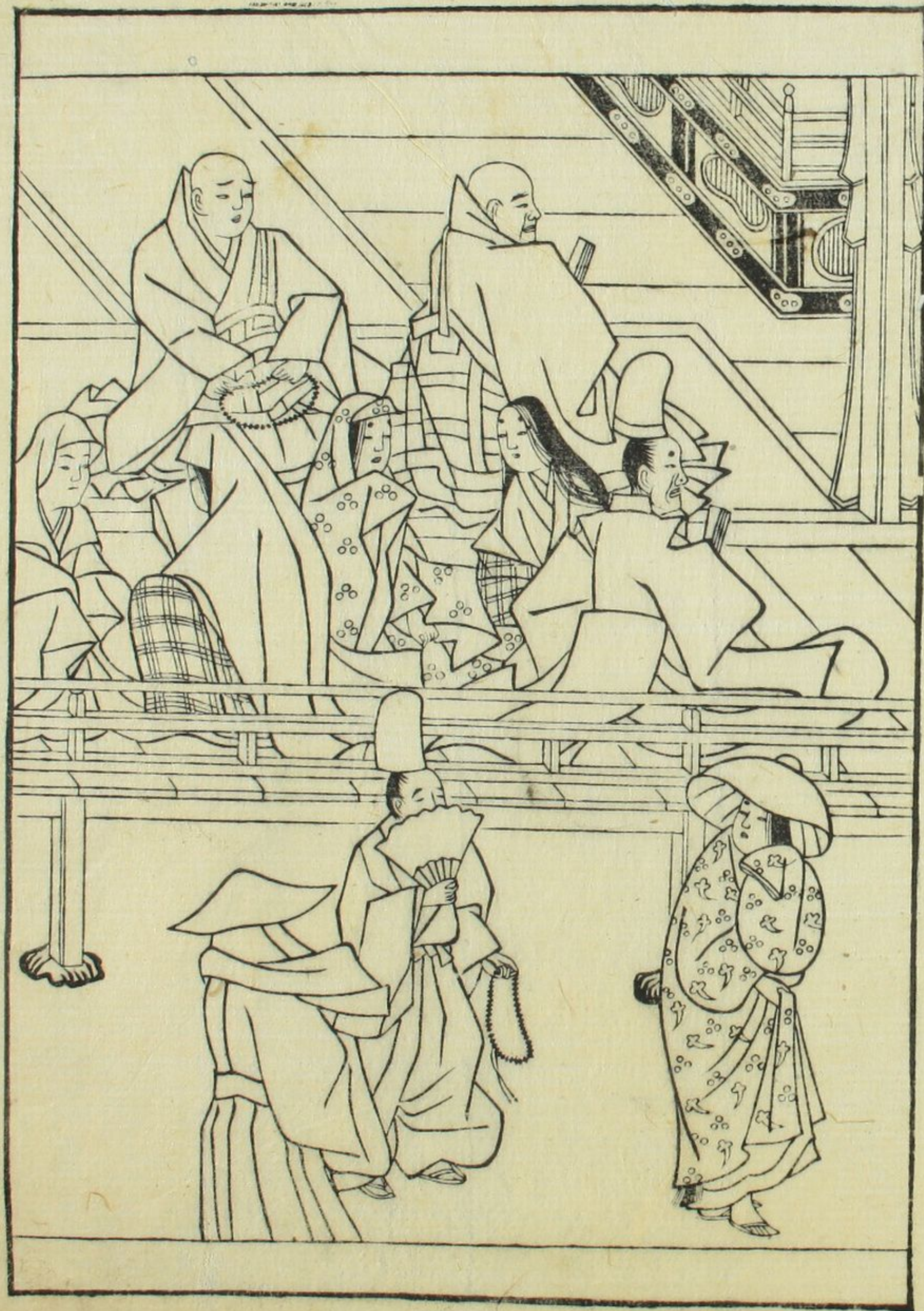


九衛門志藤原宗貞たけひの妻室惟宗の氏女文婦文婦
心誠一にして堂舎建立たけ願をなす。雲居寺たけに
東の頬たけよその地を志め。建仁元年四月十九日上棟
一。同二年春比其功として終りけり。本尊、阿弥
陀の像。脇士、觀音地藏を安置たてまつり。同年の
妹わきたつら。上人吉水のひら房より。雲居寺たけに勝應たけ院
院へ百日えんげい参詣し。法し時。願主宗貞ひん門前たけに躰居たけ
て。堂舎建立の旨趣をのへに供養くわいあり。き中たけ院たけ

申もれ。上人堂内たけに入たけり。佛像安置のたけ躰たけをたけ
て。ま。こ。堂たけの源たけ空たけの供養たけす。ま。堂たけよ。あ。た。て
お。れ。よ。ら。わ。願たけ主たけの心をたけほたけし。周章たけするたけ
ころ。或人たけか。て。云。上人たけの勢たけ至たけ菩薩たけの垂跡たけは。あ。
ます。と。云。お。人。口。あ。は。り。ま。る。に。脇士たけり。勢たけ至たけ菩
薩たけのま。は。ま。る。と。上。人。の。心。よ。ま。る。と。ま。る。と。
お。れ。い。う。又。勢たけ至たけ菩薩たけを。造立たけし。な。地たけ藏たけを。ハ
異所たけに。渡たけし。た。て。ま。る。と。跡たけは。勢たけ至たけ菩薩たけは。



居すりてまつりし。後上人又雲居寺いんぎんじの將建仁
 二年八月晦日ごころひにて案内を申處まうよ。お遠とほく
 供養くよう成なりげられし。別のけいさくに啓けい白はくなり。たゞ念佛千遍
 を唱なへたまひ。やうく不斷念佛だんぜんぶつを始行しりやうせし。此寺号こゝ成
 引ひ搆か寺じともいふ。此堂こゝいまだあり。勢至菩薩しそく乃
 ううろようとうへうとうまうつうの地藏ぢざうになり

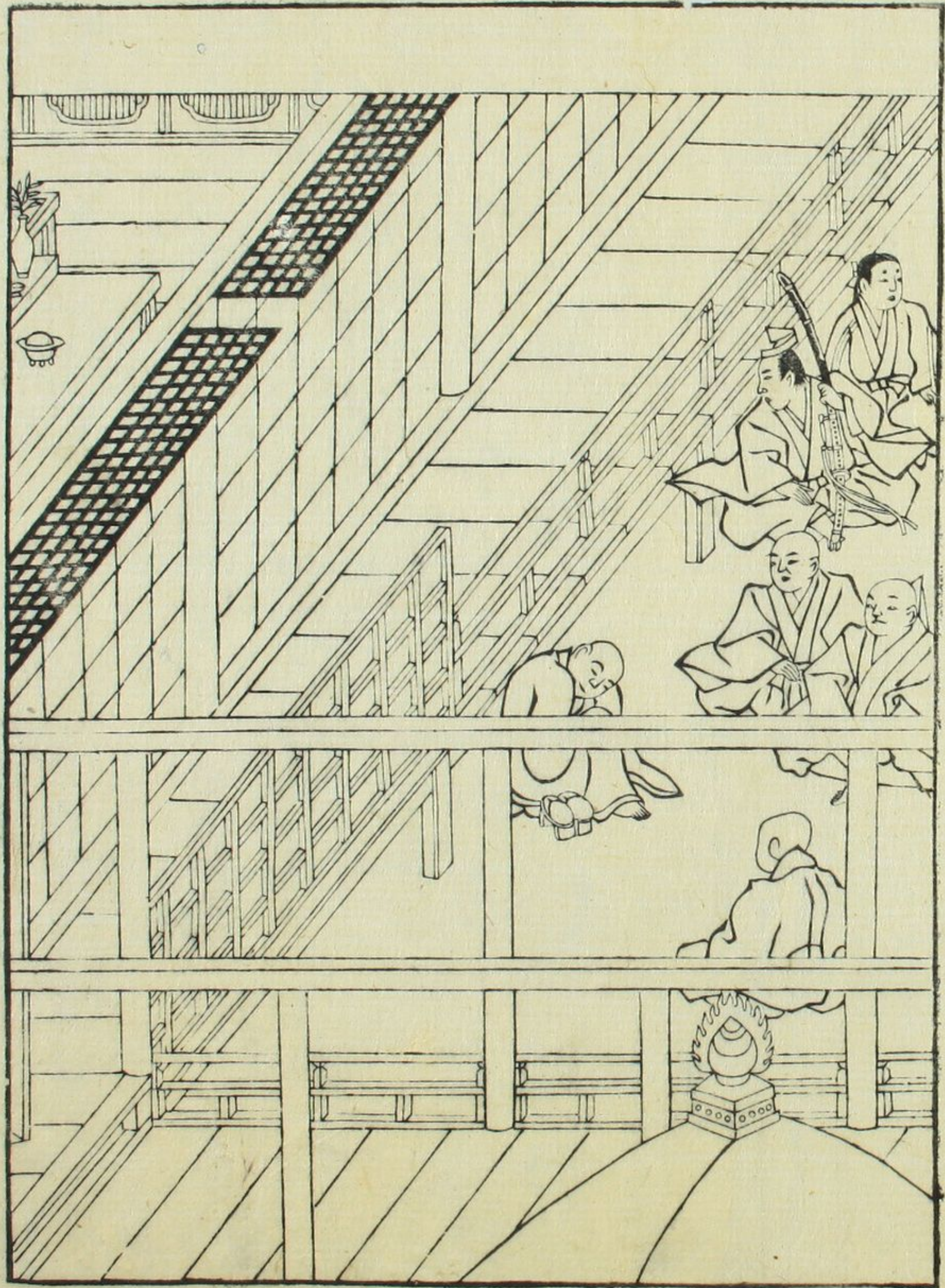


法然上人行状畫圖第十四

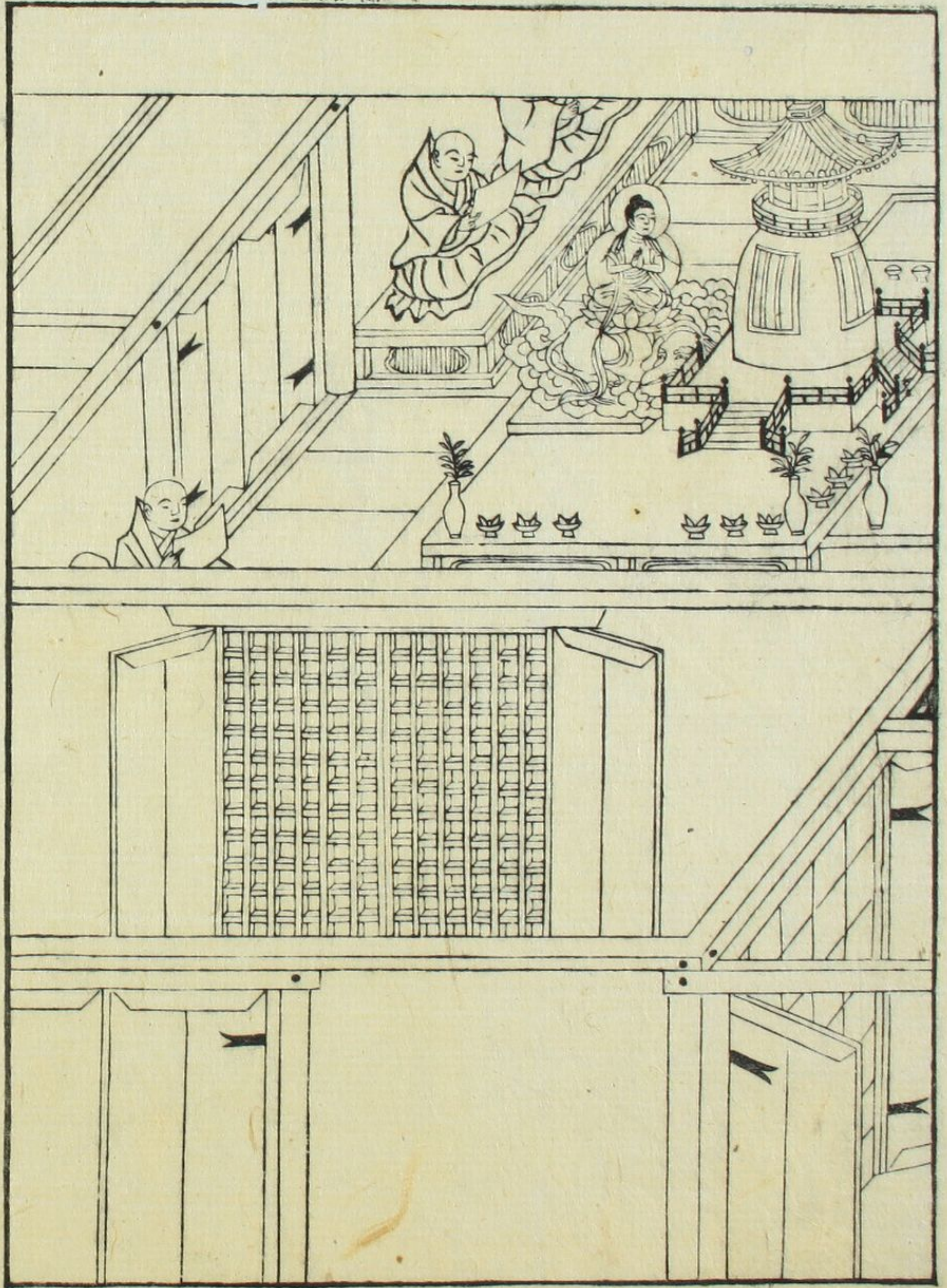
天台座主權僧正顯真けんしん。大僧都だいそうとよておきりし。記
兼安三年生年四十三しんねん。官職を辭し菩提ぼだいを求
る。大原おほはらに龍居りゆうき。春殊はるにじゆ四箇年しつかんねんよ及およびをこゝろよ。安
元二年七月八日げんねん。建春門院崩御けんしゆんもんいんくわうごのる。これに菩提ぼだいの為
し。法住寺ほふぢゆうじに新法華堂しんほふけだうをたし。此こゝの山忌やまぎを迎へ
る。同八月廿五日どうがふがににじふごにちに行法ぎやうほふをり。免めんる。此こゝにその先
達だつし。叡山えいざん法花堂ほふけだうに和尚位わうじやうゐ。云い覺房かくぼう真惠まゐをせめ

はこれ一は勅定よきとていへ時大原の僧都これ
関をのぞきて聊宿願の事侍り志づく入衆あふへ
らるより堂中よゆれをこわく後同九月一日子れ尅
よ登山一則系堂して一衆よ列し藤次よまませして
三床れ二和尚よ著し丑の尅一時はと先罷きて後一
床の一和尚よいさなひぬ其後禪光房顯明を代
官とて三大師天台傳 教慈覺の川忌日以下大小の課役等
こよ新入のこく勤仕きこれぬ又四季懺法れ初夜の

時よわたりて系堂一終いき是則出離れ道たやと
かたさる事候たを起く名利の学道候のれ終居候
といへも安ん出離れ直路思案いまこ一安んば昼夜
よ此事をのこたげく處よ十二禪衆の関を聞とれ乃
半行半坐れ行法天台大師御筆れ法華經を本尊
として傳教大師弘仁三年七月よ卓創したる要
行なりこれ生死解脱の直路なるへとねいり終
て十二禪衆よ列し終よきり毎日毎時のはとあり



懺法せんぽう一卷いちまゝ越こくくへへくく修しゆする事のうれ僧都とうめをら
 きくらい一いち衆しゆ同心どうしんしてそれ行いまにをこらへりてすべし。



其後八箇年此歳曆改すまて壽永二年九月よ。日
 吉の御幸此時座主明雲乃賞改ゆづも。法平に
 叙せらるるといへも。かて松門をとり。ひそかに蓬
 屋より居し。あつたに。生死れあ。さ
 事改のまわげく。同じ法流をく。免るより。三改もて。
 法平に永辦法平。お離れ道改よりあ。せ。強よ。
 くれ。ご。ま。の。事。法。然。上。人。よ。以。尋。あ。る。を。此。由。を。永
 辨申も。る。は。は。ま。り。相。換。房。と。云。者。改。使。者。と。し。て。

登山の便所よりあけぼの音信あり先路へ申さるる處
ま事侍るより信りたりのまこと上人坂本へ返り路
くかへと申されたり。法中ありまうあひく對面し。
こむじいごとく生死をまあれたるまことこの路よ
上人いふまをいふまはまをいふまと法中
申されたるまは達りまはあせむ。定めて思定め
路はるるまあるま。志ありまことありこの路へん。
上人自身の為まはま。いふま。思定めしるるま。法中

よく極樂に往生候へば供養と申されたるま
法中順次乃往生とま。此れま。こむじい
す。いふま。こむじい。ま。よく往生候へば供養
やこの路小時上人言はま。よく成佛候へばと
ま。往生い得やと。道綽善導の心より此を佛の
願力を強縁とて。乱想の九丈浄土よ往生すと
其後たごひよ言説なくして上人も返り後。
法中の返り。法然房の智恵深遠なきま。聊

偏執の失ありと。上人の事返入りさう強く。家
あさり事よりの如く活潑心をもちます事如く。空
の殆ど法。法中又の如く強く。法に然也
わに顕密の教文より誓古をうしじといへども。志
うにむく名利の爲として。浄土を心ごうばる
ゆへり。道綽善導の釋義をうらひ。法然房よ
あはれ。おれかくのごとく。れをいひ。ゆきや
きて。このことよらう。百日の石大原に就居

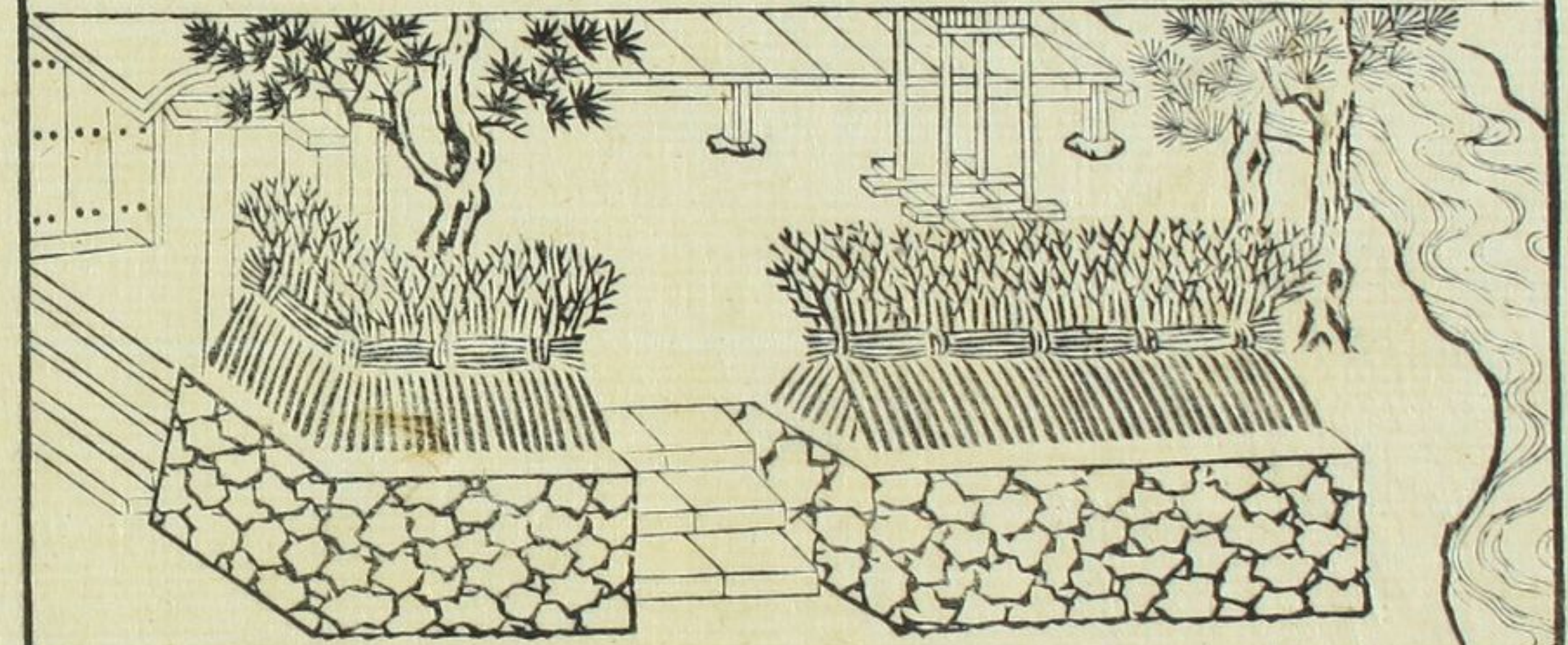
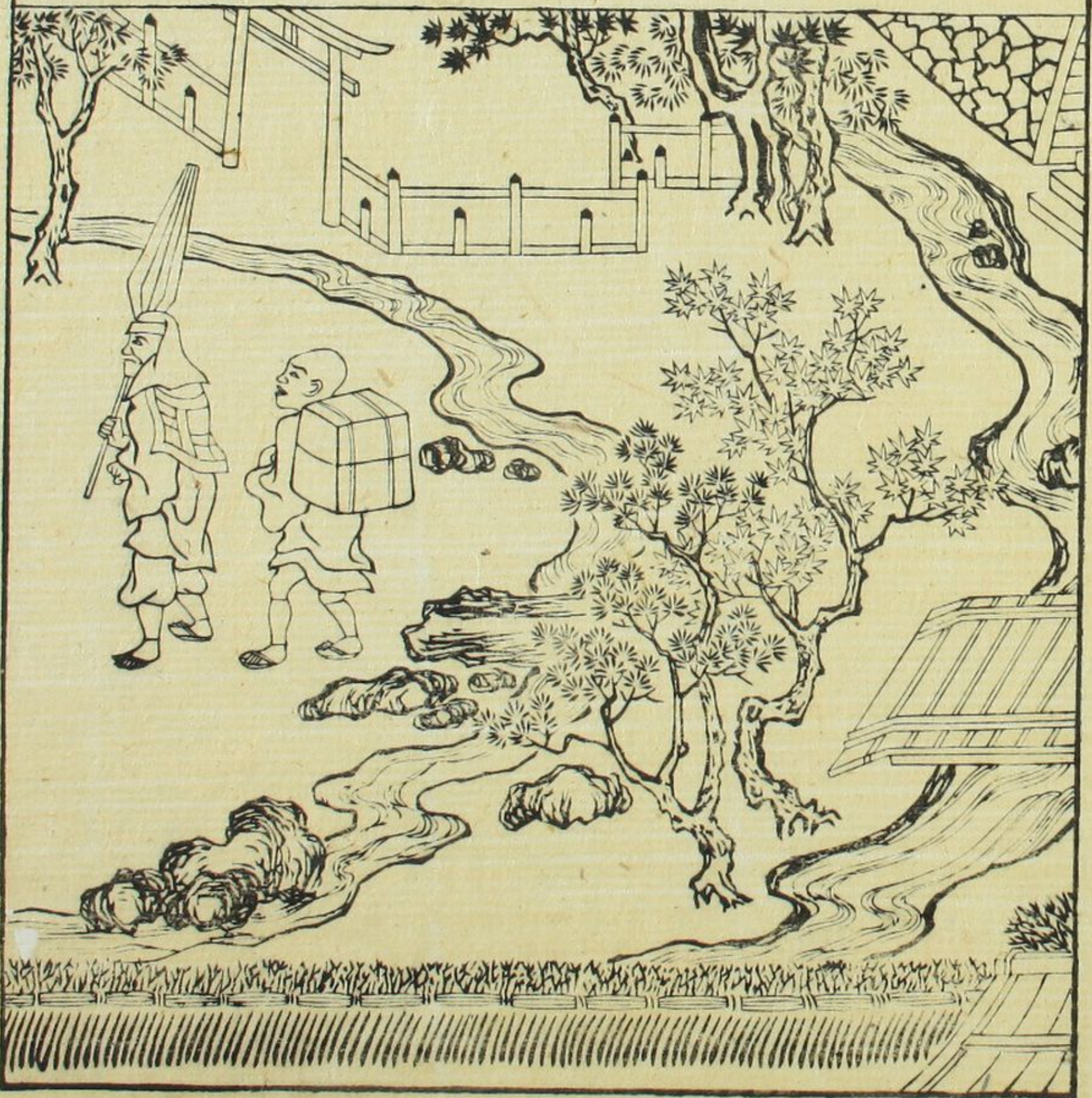
して。浄土の章疏を披閱したるは。いづのら。すぐよ
浄土の法門をこそ見立侍ゆ。れ来際して。護せ
しめ強くと信られり。事れど。文治二年。姪の
上人。大原へ渡り。法如。東大寺。大勧進。俊宗。房重
源。いよ。出離。道城。なり。定めざり。ある。紙。長。と。強
て。二。由。城。告。信。れ。り。を。遣。い。弟子。三十。餘。人。を
相。會。して。大原に。ひ。り。勝林院の。丈六堂。り。會
合。と。上人の。方。よ。の。重源以下。れ。弟子。ら。も。その。ごと

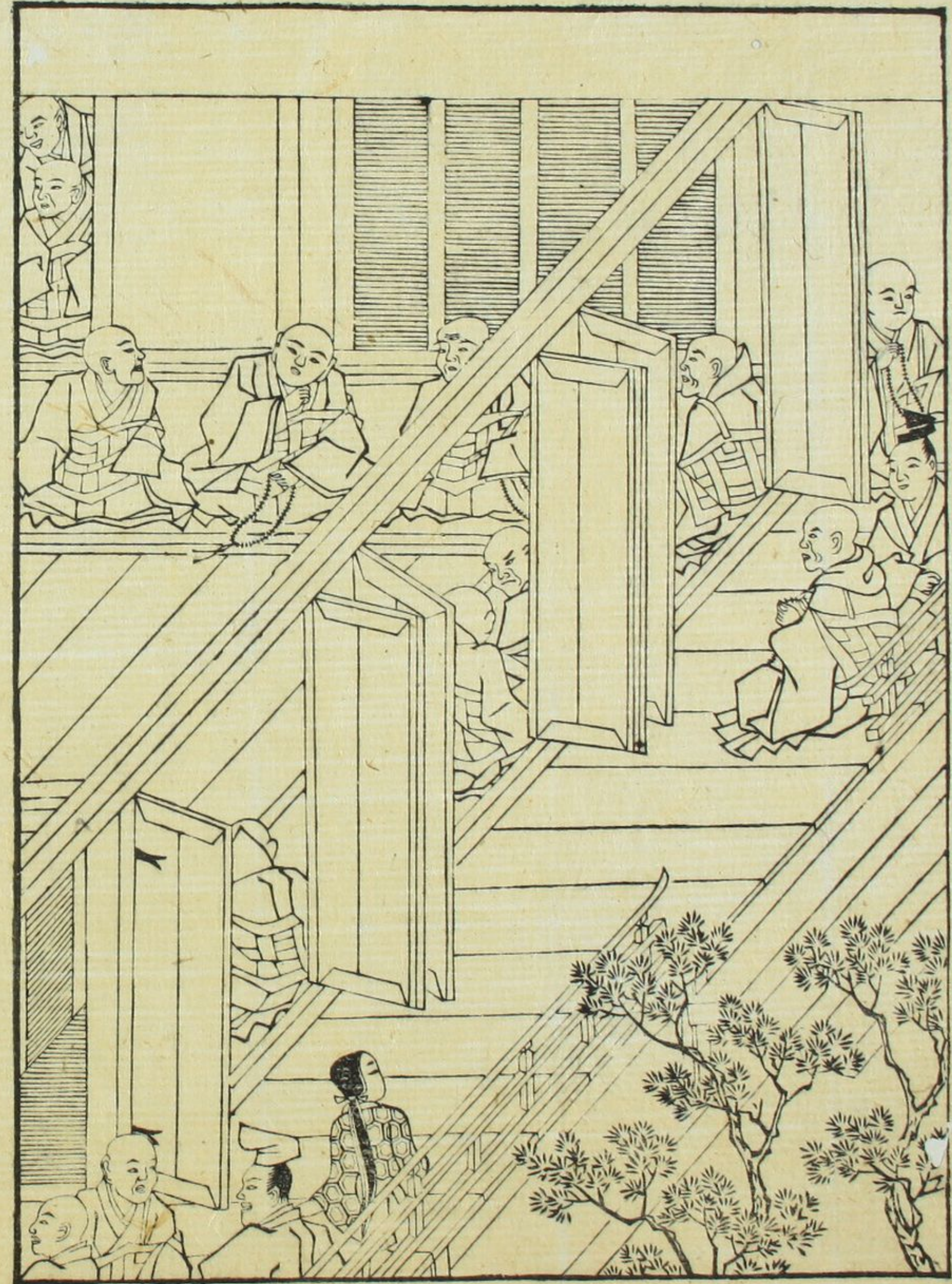
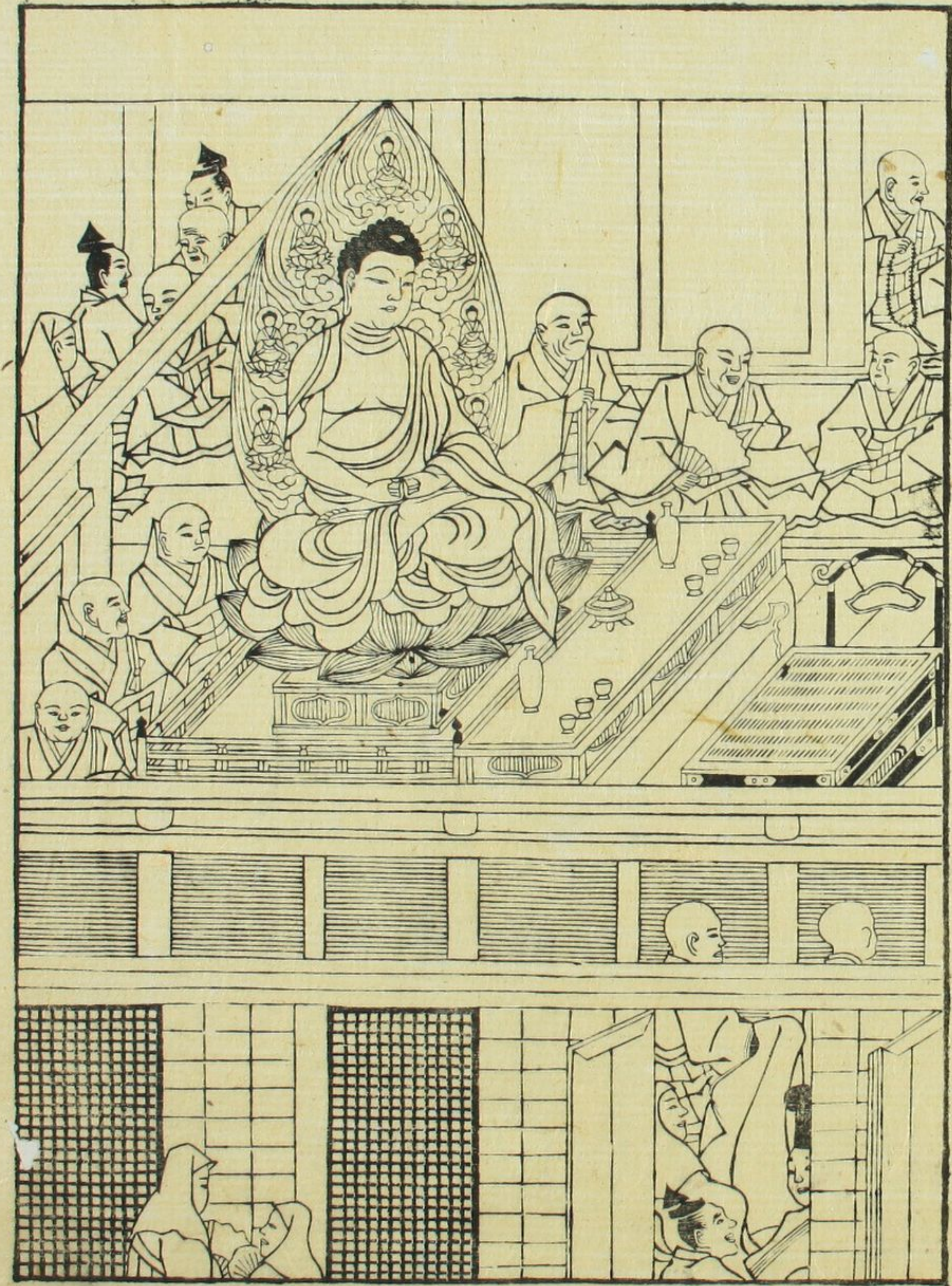
何つまじき法乎此方より門徒以下の碩学ほびよ
大原に聖達住しけりなれど山門の衆徒をくづめ
て見聞の人おやりをせり論談往復より事一日
一夜あり上人法相三論華嚴法華真言佛心等乃
諸宗よりやりて九丈の初心より佛果に極位より
たすまで修行の方軌得度乃相由はぶさたのべ
給て是等れ法より義理より利益とくれり機
法相應せば得脱くびと返回すす極く清くし

源実朝と此の頑愚れ多しより更りその器にあら
ざるゆへはしりかへくまどひをとりまざる源
実朝心後聖道門の諸宗よはきてひろく本體
は道をとらふ物よかきもかへくこれをかへし是則
せざる人をろりて機教あひさむくゆなり
まの法善導の釋義三部の妙典乃く法孫隆の
願力を強縁とするゆへ有智無智を論せし持戒
破戒をろりて源無漏無生の圓りむせれてなく

不退を證あきらむ事。たゞこれ浄土の二門念佛の一行
なり。法藏比丘の因行かんぎやうより。弥陀如来の果徳くこくよ
いふまで。理りはまゝの詞ことばをたゞくをうりて。おと
これ涯ぎか。自證じじゆをのぶるがたなり。はるく上機じの
解行げぎやうをたゞくもん。よはあ。法ほの法ほをたゞく。法
下げより。めりて満座まんざの衆しゆ。これ信しん仗ぢやう。ふきり。
か。は。ん。ま。源げん宣げん上人しん。ま。こ。ろ。よ。は。弥み陀た如来にがひの
應おう現げん。と。感かん歎たん。一。何なにの。も。法ほ。香かう爐ろを。こ。り。

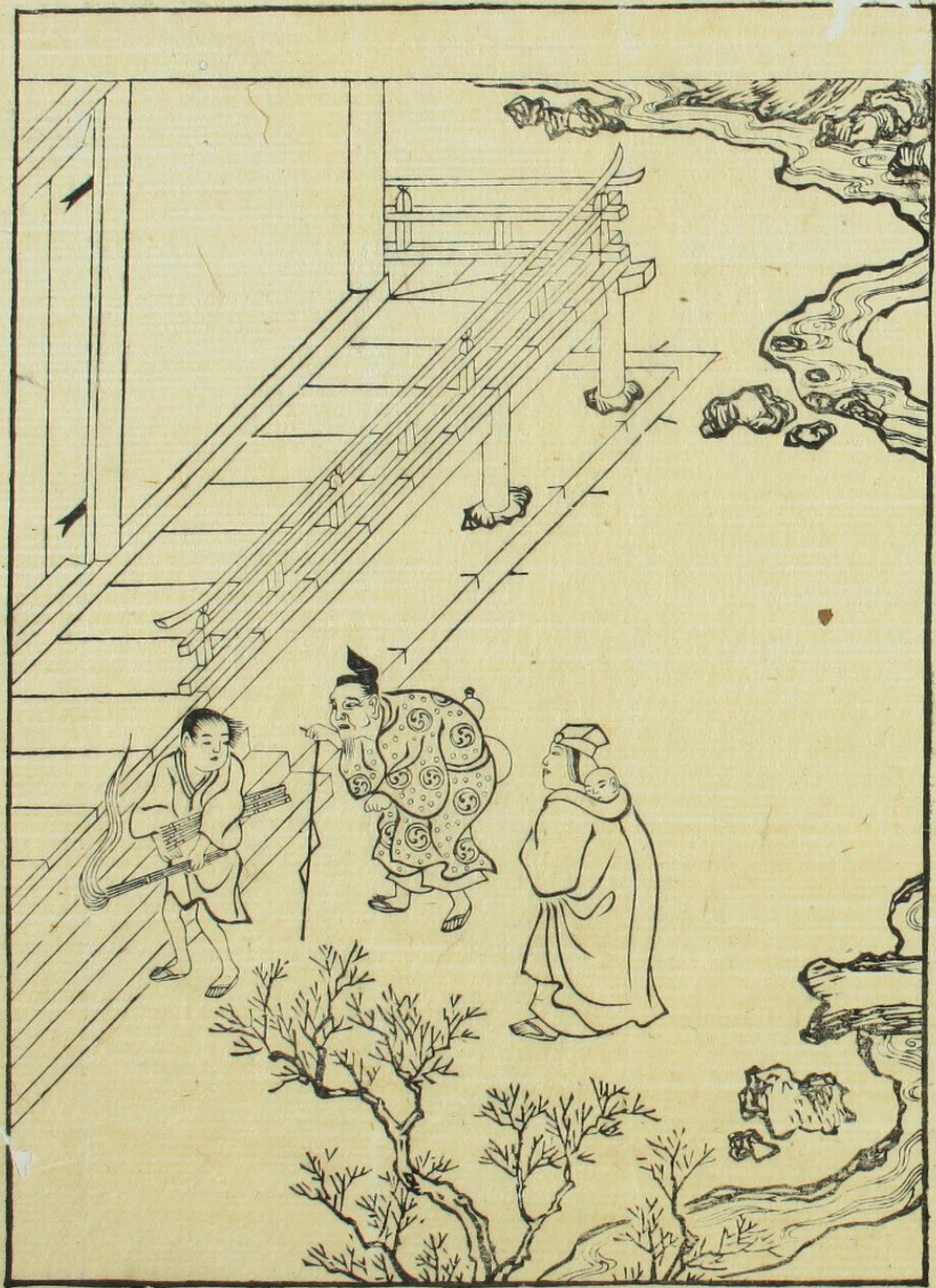
高聲念佛こうせいねんぶつをうぐめ行道ぎやうだう。たまふり。大衆だいしゆと。同どう
音おん。念佛ねんぶつは。修しゆす。事こと。三。日にち。三。夜や。と。点てん山さん谷こく。よ。ち。
ひき林りん野やを。う。こ。す。信しんを。お。う。縁えんを。結むすぶ。念ねんは
か。ら。ま。



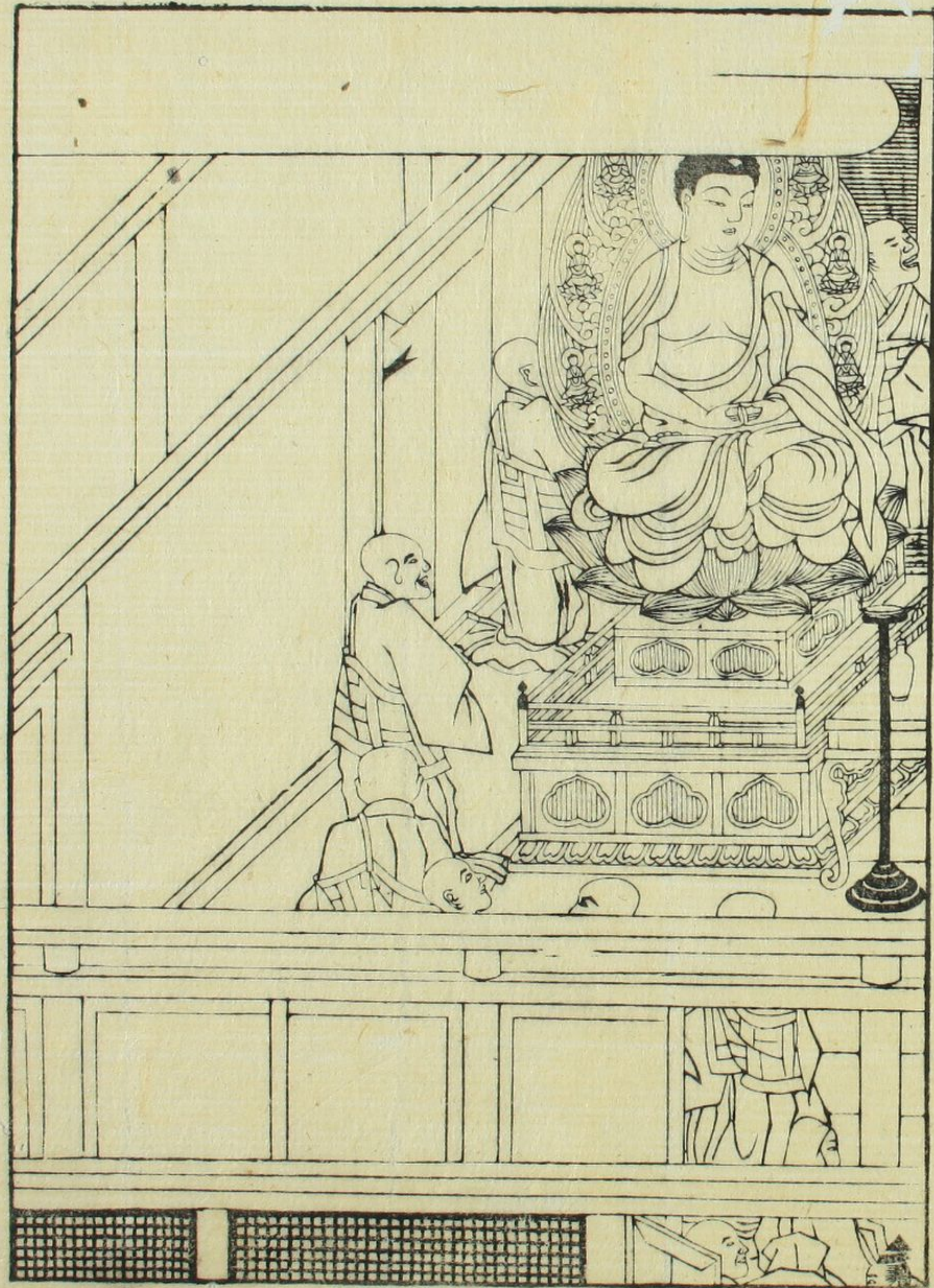


不足のあらん法界宮よらんとなえつ。極樂の東
門のりいれ法身輝を證せんとおりのく。蘇陀乃名
号取らなふべし。道綽の講説はよく一向の念
佛よれり。善導の雜行をきこひて專修をすじ。
占留の林よ入れれい餘香波を流。淨名の室より
入れまじ。功德の香をのまぐ。山のよらんい。
あゝ念佛の香波のまがぎ。念佛れををのまきここ
とにちり候いふや。取詮 文治二年十二月廿九日護

摩堂尼の前へと云。法専專修の身よれり。念佛を
行らば候し事。この消息よ明らけり。又十二人の
衆を定めをきて文治三年正月十五日より勝林院
よ不斷念佛をんが免をこなられしに法専の十二
人の随一よて成就をぞ候と免候も。開白の夜
の十二人皆兼行行道し。同音れ念佛を修する
り。毘沙門天王列よ立候へり。法専よれあ
たり拜しを候ひて良忍上人の融通念佛よは。

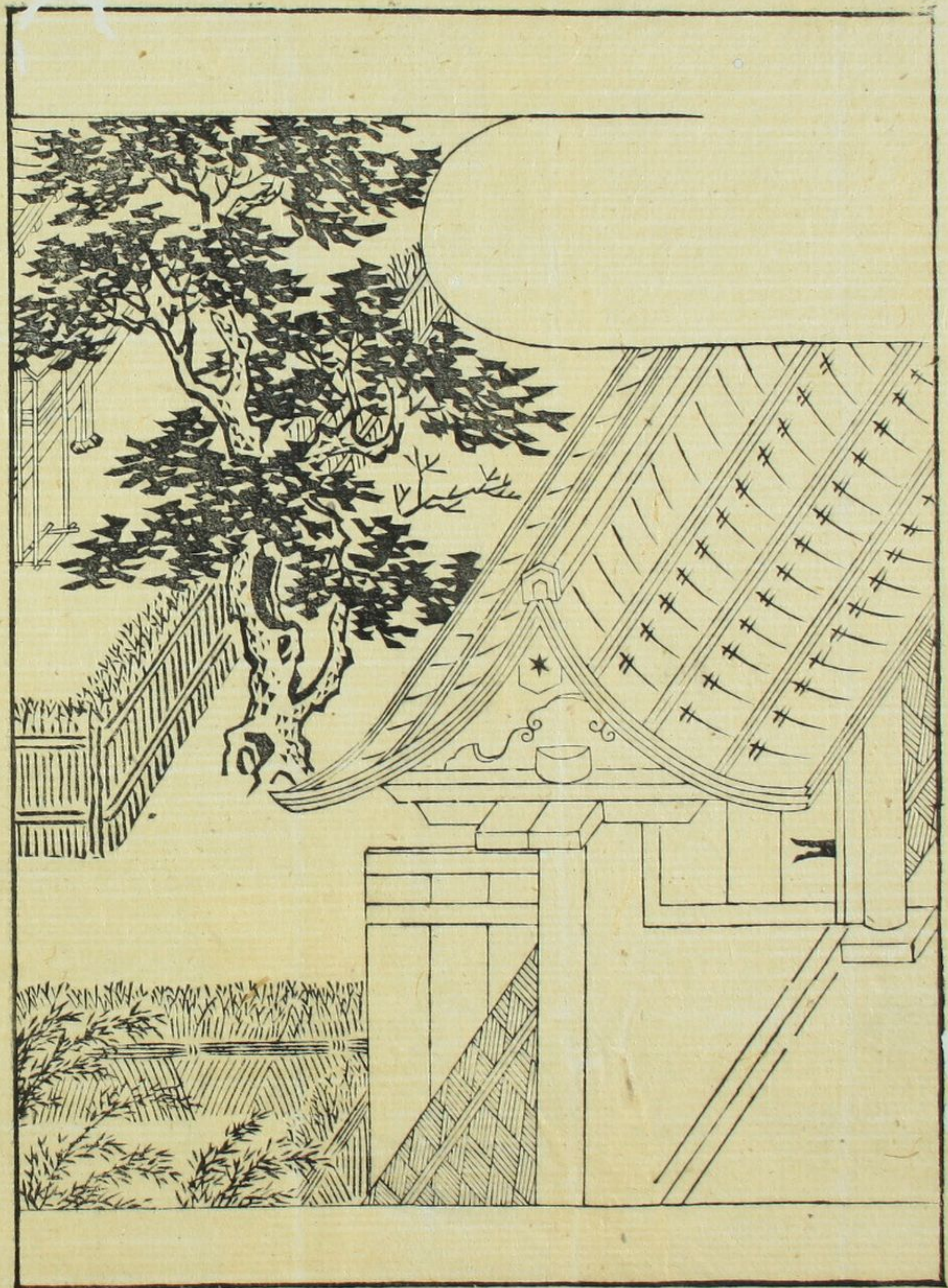
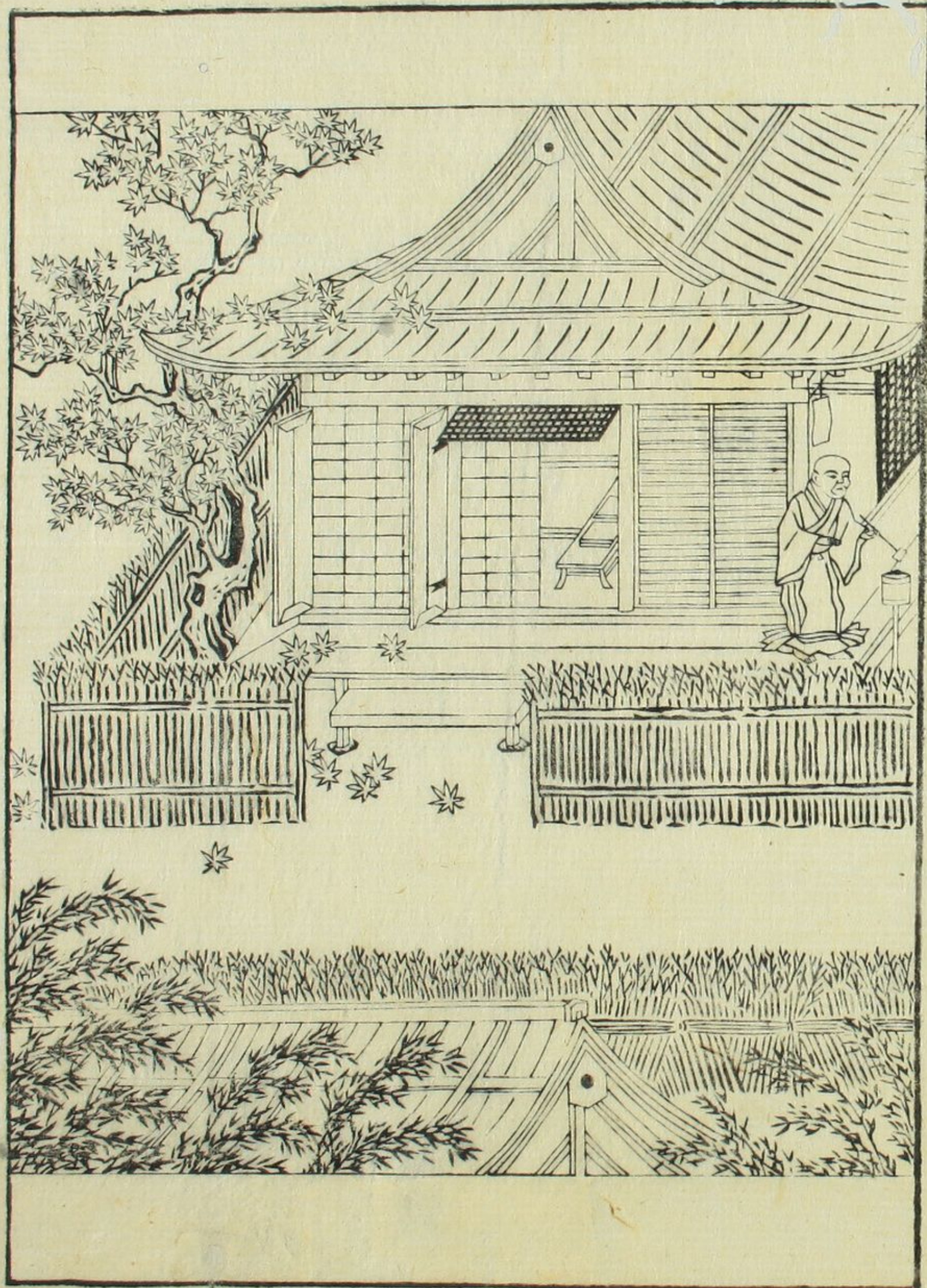


鞍馬寺くらまたらの毘沙門天王びしゃもんてんくうくうたまひあほへ諸天
 善神ぜんじんをすめ入給いれたまひき家いへこそ恩念おんねんせしれいよ
 く信心しんじんをまゝ貴たかくおほへきれん念佛守護ねんぶしゆご
 の為ためり毘沙門天王びしゃもんてん當室とうしつのうらに安置あんじせし
 きあり。

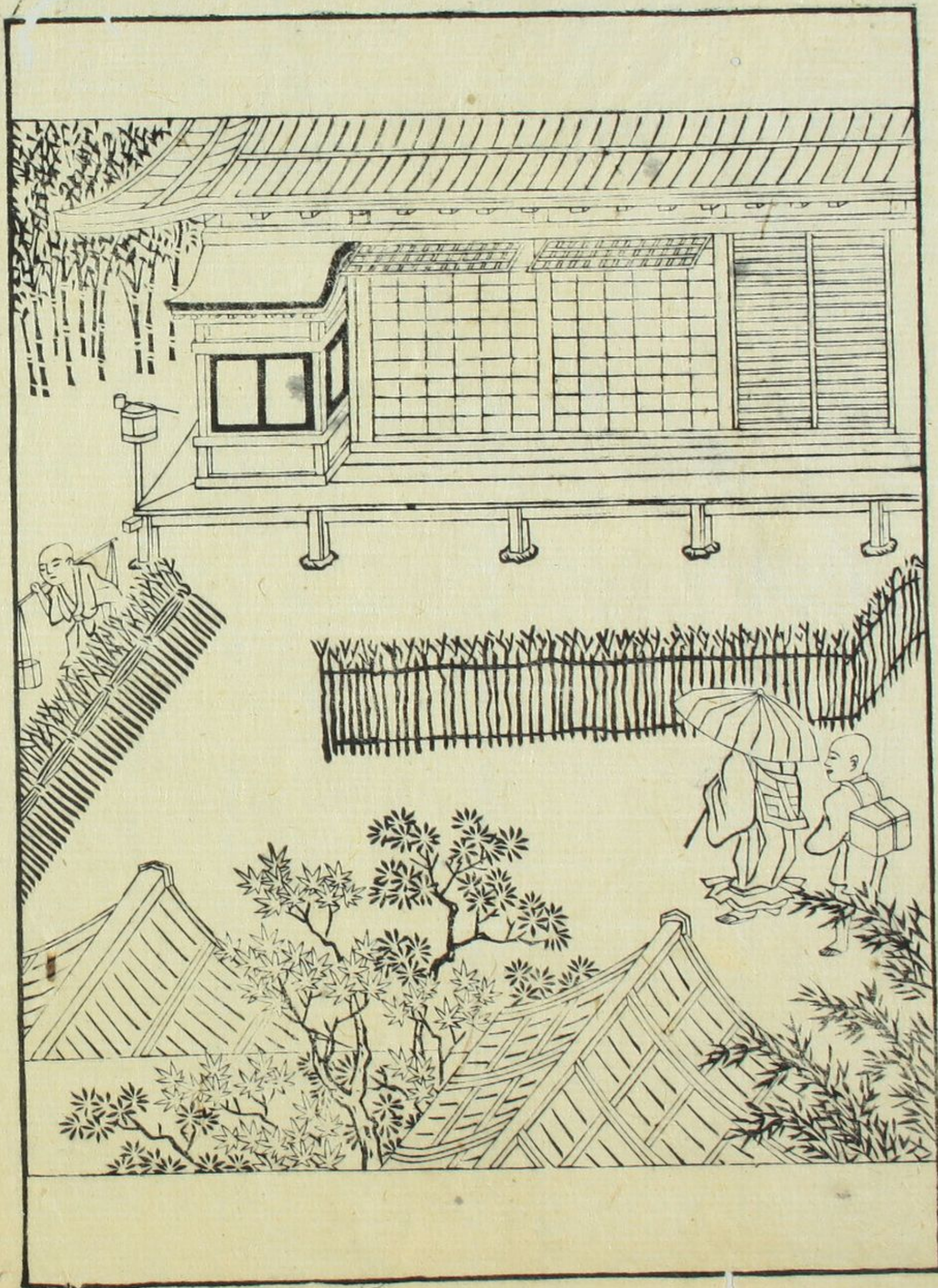


法王の願をたてていふ。これ寺に五坊をた
て。一向稱名を相續して餘行をまゝにせし
む。その願じゆ。池にわく。文治三年十月よ
ら。池より。池上の阿闍梨白皇慶の舊跡。乙
護法守護の靈地。五坊をまゝ。楞嚴院安樂の
谷。谷より。新安樂と号す。性智房。鏡智房。妙
智房。佛智房。勝智房と号す。此ら。その行
法に退轉せしむ。此時大佛の上人俊乘

房又一の意樂也。我國の道俗。炎魔王宮
よひ。名字問まんと。此佛号を唱へ
り。阿彌陀佛名は。南無阿彌陀佛と号す。此我朝乃
阿彌陀佛名は。此なり。



其後三千の衆徒をりて舉申にりて文
 治六年三月七日天台座主に補せし家といへども
 かく辞し申給し後勅使大原へひひて宣命
 紙をりて座主職をさしめし家はつるよ石本
 けきて同五月廿四日寂勝講の證義をばらめ同二
 十八日權僧正に拜任と治山三箇年の間内論義
 二箇度寂光大師の御廟の番論義傳教大師の
 御廟浄土院の番論義やと取をこなされり



吾山の佛法はえきりなればとて我たるをとおこ
はれしはも。こころはよいなれば。稱名は行業をこ
たらしめて。法華堂に初夜は行法よ。高聲念
佛千遍をくりし修せしは。それ行いまに退轉お
し。日來の腫物乃いし。ふいに増氣して淨
土院の番論義の夜建久三年十一月十四日寅尅
東塔圓融房よりして。正念をうけ。念佛相續し
往生の素懷をこけ。遺言は旨あり。多し。す

なつら又原にをりたり。たてまつらぬ。近古に高僧山
門の英傑たり。きつたが。上人の訓導によりて
出要をたし。いさめ。心あり。人なり。その
あはれ。こころは。僧正は。ひに。の。ま。い。た。り。
一向專念の身と。願密の行業を。を。ま。
し。う。め。い。し。心。ぼ。そ。わ。し。た。り。と。申。は。し。
け。る。

